
親子同居スタイル・多様化の実態

二世帯住宅における独立と融合

調査報告書

旭化成ホームズ株式会社
二世帯住宅研究所

はじめに

旭化成では昭和50年(1975年)に業界で初めて二世帯住宅を発表し、以来30年以上が経過しました。この間当社では昭和55年(1980年)に親子同居専門研究機関である「二世帯住宅研究所」を設立し、家族社会学や心理学的視点から各種の生活実態調査を行い、シンポジウムや出版活動などを通して「二世帯住宅」の普及・浸透に努めてまいりました。

これまでに提案してきた中には、同居生活の基本的な心構えや準備を定めた「親子同居の7原則」、同居相手による暮らし方の違いをまとめた「息子夫婦同居・娘夫婦同居、8つの工夫」など、今日の親子同居の規範となる考え方も少なくありません。また二世帯住宅という住まい方の概念も、日本独自の住文化として広く日本の社会に浸透してきていると思われまます。

しかし、親子同居のスタイルは時代とともに移り変わります。とりわけ今日の都市部における住宅では、人口の大都市集中や地価の動向、あるいは本格的な少子・高齢社会の到来、女性の社会進出、単身家族の増加などにみられる家族の変化や多様化は見逃せない要因となりそうです。さらに人々の家族観とりわけ親子同居に対する考え方の変化も重要な要因になってくると思われまます。

今回の調査は、従来とは異なり、二世帯住宅(親子同居でキッチンを2つ持つ住宅)だけでなく単世帯住宅(親子同居でキッチンが1つのみの住宅)も含めた「現在親子同居を実践している当社が供給した住宅(ヘーベルハウス)の入居者」を対象に、Webによる調査を実施しました。少子高齢社会の進展、家族の少人数化、同居観の変化等を背景とした「親子同居スタイルの多様化」の実態を調査することにより、今後の親子同居と住まいの方向性を探ることを目的としております。

当社では、今後とも社会の変化や同居意識の変化を捉えた生活者に対する調査を行ないながら、二世帯住宅を一層充実、発展させていきたいと考えています。

2007年7月

旭化成ホームズ株式会社
二世帯住宅研究所

目次

はじめに	1
調査結果の要約	5

第一章：親子同居家族の実態

調査の背景	11
調査概要	13
回答者属性	15
建物分離度の分類	17
住宅の状況	19

第二章：親子同居の理由

同居の理由・・・現在親子同居者	23
同居家族の人数・・・現在親子同居者	25
同居する場合・・・親子同居想定者	27
同居解消の理由・・・親子同居経験者	29
親世帯の加齢への備え	31
続柄関係	33
子世帯への育児協力	35

第三章：同居スタイルと満足度

同居生活の志向	39
夕食の独立と融合	41
同居スタイルの指標	43
同居の満足度	45

第四章：同居スタイルに合わせたプランニング

同居スタイルに合わせた建物分離度	49
洗濯機	51
浴室	53
世帯間の仕切り	55
将来の活用	57
親子同居想定者の備え	59
設計提案例1:「夕食独立」同居のための独立二世帯	61
設計提案例2:「夕食融合」同居のための融合二世帯	63

本調査の意義

67

片親同居、4人以下の同居に多い 融合志向の同居スタイル

● 片親同居、4人以下の少人数同居や娘夫婦同居に注目すべき

従来の二世帯同居は親世帯夫婦2人＋子世帯3～4人家族という家族構成のイメージがありましたが、今回調査では親世帯が片親のケースが全体の43%を占め、4人以下の少人数同居家族も28%を占めていました。また片親同居、少人数同居は親世帯が高齢化するにつれて増え、70代の片親比率は45%、4人以下の同居は26%で、80代以上では片親同居80%、4人以下の同居が50%に達していました。

伝統的に息子、特に長男との同居が当たり前であった続柄関係においても、息子夫婦同居と娘夫婦同居の比率を親世帯の年代別に見ると若い世代ほど娘夫婦同居の比率が高く、70代においては27%であった娘夫婦同居の比率は、50代では49%に達しています。（息子夫婦同居は62%、三世帯同居による重複を含む）。娘夫婦同居がより若い世代で一般化し、息子夫婦同居と対等に考えられるようになってきたことを示すものと言えるでしょう。

● 片親同居、少人数同居、娘夫婦同居は融合志向の同居スタイルが多い

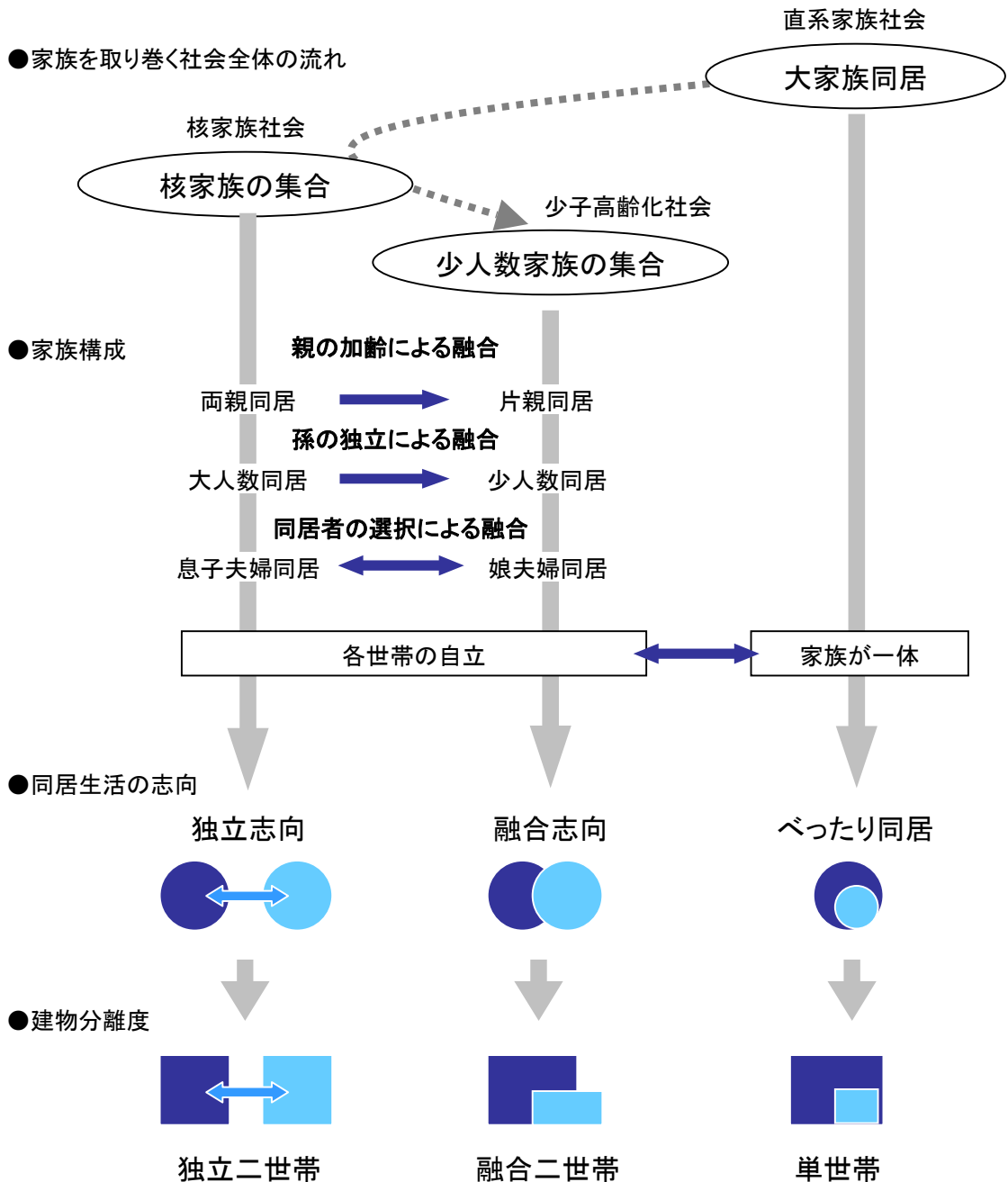
同居生活の志向と夕食の場所が別々（独立）か一緒（融合）かは強い相関があります。夕食の独立・融合は朝食、洗濯、家計等同居スタイル全般に強い影響を及ぼしており、同居スタイルの指標となり得るものでした。夕食の独立・融合と、家族構成との関係を見ると、片親同居、少人数同居、娘夫婦同居はいずれも融合志向が多い傾向が見られました。

● 世帯間の自立と融合志向の同居スタイルの両立

同居の家族を介護した経験者は親世帯の高齢化につれて、60代19%→70代22%→80代48%と増加していき、親同居経験者は72%と、同居家族による介護がほとんどのケースで必要なことが示されました。また、親同居想定者は親が自立できなくなった場合に同居を想定している方が多く、親世帯の高齢化に伴って同居スタイルが融合志向に向かうことが考えられます。

しかし、例えば夕食が一緒であるからといって、全ての行為が融合するわけではなく、洗濯や光熱費の負担等自分のことは自分で、という意識も感じられました。親世帯が最大限自立しながら、適宜子世帯にサポートされる同居スタイルが重要といえそうです。

■ 少子高齢化社会と同居スタイル、建物分離度の関係



同居スタイルに合う、将来活用を視野に入れた プランニングを

● 夕食独立なら独立二世帯、夕食融合なら融合二世帯が満足度が高い

夕食独立者/融合者に分けて同居満足度を見ると、それぞれ90%、82%と基本的には高い満足度が得られています。夕食独立者においては独立二世帯の満足度が高く、共用二世帯は種々の制約から共用とせざるを得なかったことがうかがえます。独立二世帯の中では内部行来型の希望者が多く、不満も最も少ないという結果になっています。これは、独立二世帯共通のメリットとして自分の世帯専用の部分だけで日常生活が可能のため自世帯の生活リズムで気兼ねなく暮らせること、外部行来型独立二世帯の場合はプライバシーの確保に優れること、内部行来型独立二世帯は世帯間の錠を利用し交流とプライバシーのバランスを保てることや介護等で夜間の行来が生じる場合に外に出ないで済むこと、が理由として考えられます。

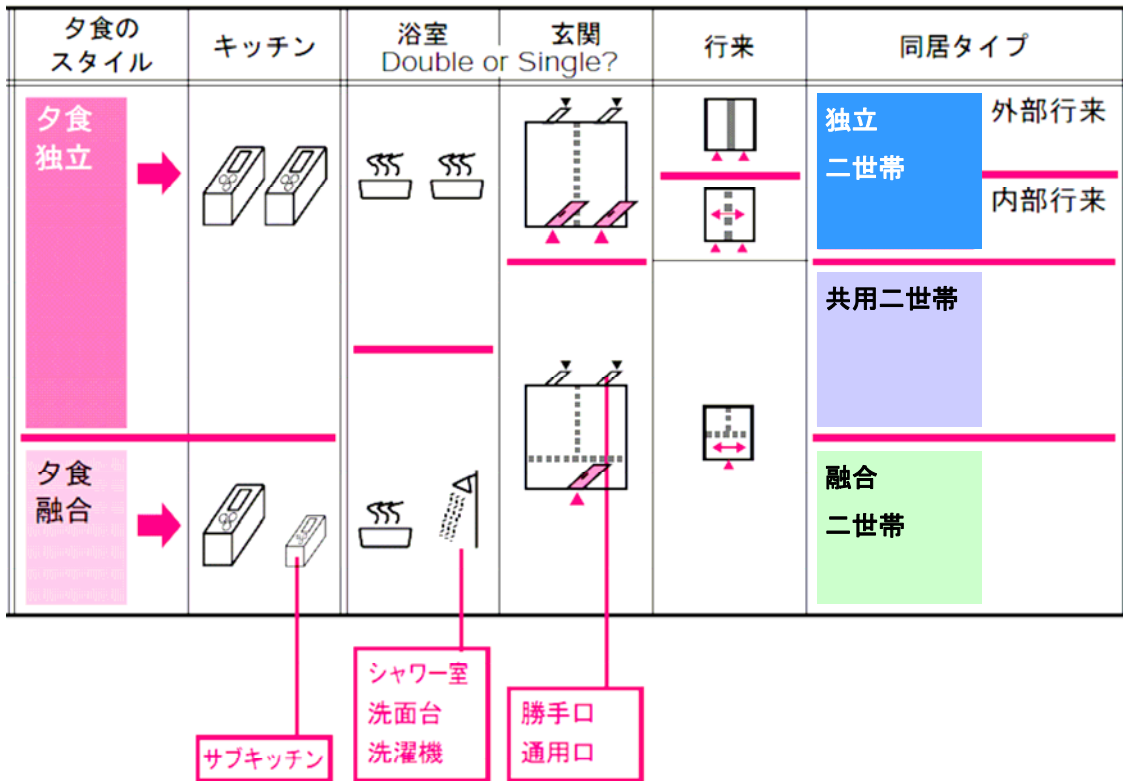
夕食融合者の中ではサブキッチンを持つ融合二世帯の満足度が高くなっています。これは、時間がまちまちになりやすい朝食や、来客時のお茶等のように、自立した世帯であれば夕食以外にも様々な生活行為が世帯毎に営まれるためです。夕食融合者の希望する建物分離度は融合二世帯を中心として分布し、夕食独立者とは大きく異なる分布となっています。このように同居スタイルによって、提案されるべき建物分離度は異なるものと考えられます。

● 将来活用：空いた世帯を独立二世帯は賃貸化、共用、融合二世帯は一体利用

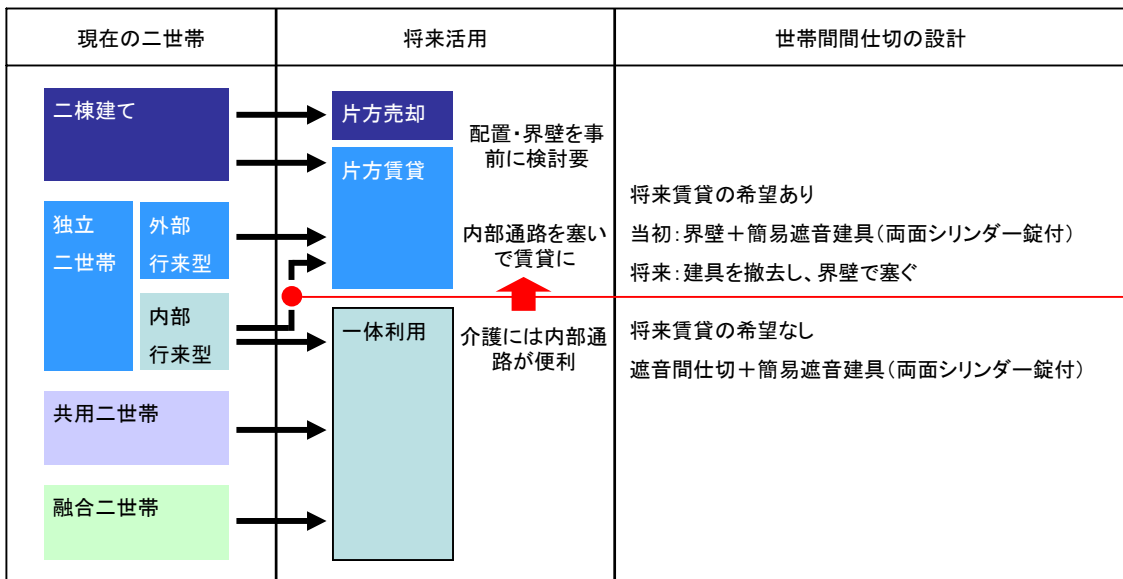
親世帯の高齢化に伴う同居の解消は必然であり、長期的な視点では空いたスペースをどう利用するかが重要と言えます。二世帯住宅として継承していくという考えは全体の約4割を占めますが、独立二世帯の場合は3割近くが賃貸化を意識しており、共用、融合二世帯の場合は残った世帯が利用する、と言った回答が5割を超えます。

独立二世帯であっても、行き来ができるものであれば融合志向のライフスタイルは可能であり、将来の資産活用を視野においてより建物分離度の高い二世帯住宅を建設することも考えられます。二世帯住宅のプランニングには、現在の同居スタイルとの整合を考慮しつつ、将来の同居スタイルの変化や、空き世帯が出た場合に様々な活用していけることが求められていると言えるでしょう。

■同居スタイルと建物分離度



■空きスペースの将来活用



第一章

親子同居家族の実態

少人数化する家族と 少子高齢化

● 少子高齢化社会

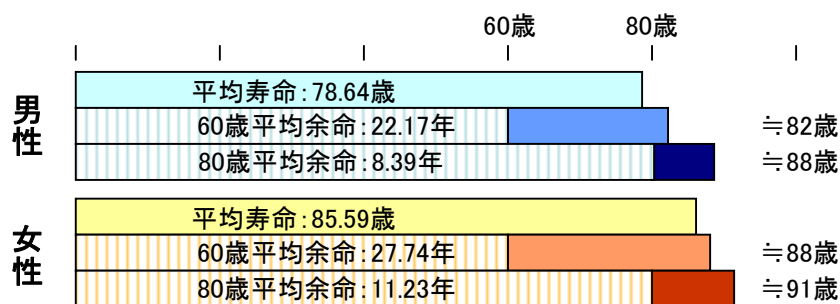
少子高齢化が言われる中、平成17年度は合計特殊出生率が1.26まで下がり、高齢者人口比率（65歳以上の高齢者が全人口に占める割合）が約20%と、日本は世界的にも非常に少子高齢化が進んだ国となっています。

また60歳時点での平均余命によると、男性は82歳、女性は88歳まで生きると予測され、従来よりも長い老後生活に備える必要がでてきていると言えるでしょう。

特に団塊の世代と呼ばれる60歳前後の方々の平均余命が、女性の場合30年近くあることを考えると、自立しながら安心な老後の生活をサポートする必要性は今まで以上にあると言えるでしょう。

平成12年にスタートした介護保険法により在宅介護の必要性が社会的にも認知され、さらに平成18年度には介護予防を重視した制度補強も行われました。

高齢者が自立した生活を長く営めると同時に、在宅介護も想定した家造りは今後益々必要となってくると言えます。



厚生省 2004年簡易生命表より作成

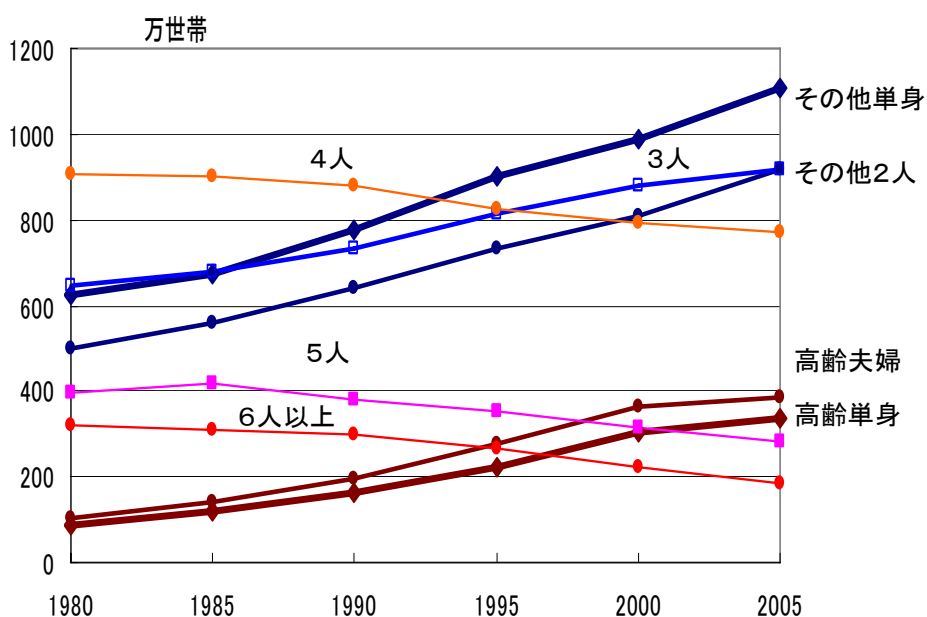
● 少人数世帯の増加と二世帯住宅

国勢調査によると、世帯構成の変化は、4人以上の世帯の減少傾向が継続し、一方で単身及び2人世帯が増加し続けています。その中で、高齢夫婦のみの世帯と高齢単身世帯は、ほぼ同じペースで増加し続け、それぞれ300万世帯を大きく超えるに至っています。

このことは、高齢期の世帯が夫婦のみで生活しているだけでなく、配偶者が亡くなった後も単身で生活している高齢者が急増していることを示しており、日常生活の維持や、やがて訪れる介護に対する不安は、世帯人数が多かった時代に比べはるかに増大しています。

ヘーベルハウスの親子同居に関する調査でも、同居している方々の43%は片親との同居となっており、両親との同居だけでなく片親との同居も二世帯住宅は見据えていく必要があります。

このように、二世帯同居は、少人数化し細分化されつつある各世帯が、お互いの自立を保ちながらも、何かあった時には家族が協力し合える住まい方として、少子高齢化、家族の少人数化が進むに従い、今後注目すべき住まい方と言えるでしょう。



調査概要

現在親子同居している ヘーベルハウス居住者の実態調査

● 調査目的

現在親子同居しているヘーベルハウス居住者を、二世帯・単世帯という建物の形態に捕われずに抽出し、家族や建物の状況と同居スタイル、同居満足度との関係を把握し、今後の親子同居と住まいの方向性を探ること。

● 調査期間

2007年 3月

● 調査対象

旭化成のヘーベルハウスに居住している、ヘーベリアンネット登録者にEメールでアンケートを依頼し、以下の3つに該当する方にWEB上でご回答いただきました。

- A.現在親子同居者：現在、親または子世帯との同居をしている方
 B.親子同居経験者：現在は同居していないが、過去親または子世帯との同居をしていた方
 C.親子同居想定者：現在は同居していないが、将来親または子世帯との同居の可能性のある方

ここで

「同居」とは、同じ建物内か、隣接した敷地の別棟にお住まいの状態を指します。

「親世帯」とは、ご自分または配偶者の親を指し、現在単身の場合も含まれます。

「子世帯」とは、既婚または婚姻経験のある子を指し、現在単身の場合も含まれます。親、子、孫はすべて回答者(ご自分)から見ての関係(回答者本人の世帯は「自分の世帯」という表現)

お住まいの住宅のタイプは問いません。単世帯・二世帯・賃貸併用住宅のいずれでも結構です。

	計	A.現在親子同居者			B.親子同居経験者			C.親子同居想定者		
回答総数	1090	697			107			286		
有効回答数	981	631			79			271		
親と同居		525			68			176		
子と同居		116			15			129		
同居構成の内訳		祖父母	親	子	祖父母	親	子	祖父母	親	子
祖父母・親・回答者	3世代	12			-			-		
親・回答者・子	3世代	-	10		-	4		-	34	
親・回答者	2世代	-	503		-	64		-	142	
回答者・子	2世代	-	106		-	11		-	95	

● 調査分析の基本方針

A.現在親子同居者(N=631) の実態分析を中心に行い

B.親子同居経験者のうち親同居経験者(N=68)

C.親同居想定者 (N=176) を比較対象とします。

● 調査対象物件の地域分布と建設年代

地域・都道府県		有効回答数					
		A.現在 親子同居		B.親同居 経験		C.親同居 想定	
東京都		140		17		21	
神奈川県		107		8		18	
その他関東		126		13		50	
	千葉県		53		7		14
	茨城県		11				5
	栃木県		4				2
	埼玉県		47		6		18
	群馬県		10				7
	山梨県		1				4
中部・静岡		113		8		34	
	静岡県		26		3		5
	愛知県		74		3		22
	岐阜県		6				
	三重県		7		2		7
関西・中国・九州		145		22		53	
	滋賀県		10				3
	大阪府		58		6		15
	京都府		13		2		4
	奈良県		5		4		
	和歌山県		3				1
	兵庫県		38		5		15
	岡山県		6				7
	広島県		3		1		2
	山口県		1				
	福岡県		5		4		6
	佐賀県		3				
計		631		68		176	

竣工年	有効回答数		
	A. 現在 親子 同居	B. 親 同居 経験	C. 親 同居 想定
1979以前	10	4	0
1980～84	15	12	2
1985～89	33	15	10
1990～94	89	12	13
1995～99	122	5	16
2000～04	225	16	73
2005～	137	4	62
計	631	68	176
平均築年数	8.1年	14.8年	5.6年
2000年以降率	57%	29%	77%

調査対象物件の地域は、関東以西太平洋側の都市部に広く分布しています。その建設年代は、

A.現在親子同居者 については1974年竣工のサンプルを含むものの、2000年以降のものが57%を占めるなど比較的新しいものが多くなっています。

B.親子同居経験者は比較的年数を経た80年代のものが多く、

C.親同居想定者は2000年以降のサンプルが約8割を占めます。

回答者属性

現在親子同居者を中心に 20代～80代まで多様な年齢層の回答

● 回答者は20代～80代に幅広く分布

現在親子同居者の回答者年齢は40代、50代を中心に幅広く分布しています。

親同居経験者については50代、60代が中心となり、
親子同居想定者については、30代の回答者が最も多くなっています。

現在親子同居者の回答の約8割を男性が占める結果となっていますが、女性回答者の比率は若い世代ほど増え、30代では36%に達しています。

	全体N	回答者年代								年齢(歳)			
		20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	不明	平均	最高	最若	
A.現在 親子 同居者	男性	500	4	76	172	125	78	41	4		51.3	84	24
	女性	131	4	42	44	29	10	2	0		45.2	79	27
	計	631	8	118	216	154	88	43	4		50.1		
	女性 比率	21%	50%	36%	20%	19%	13%	5%	0%				
B. 親同居 経験者	男性	53	0	1	9	19	18	6	0		58.5	78	39
	女性	15	0	2	5	3	4	1	0		54.0	71	36
	計	68	0	3	14	22	22	7	0		56.9		
	女性 比率	22%	0%	67%	36%	14%	18%	14%					
C. 親同居 想定者	男性	131	2	52	48	23	6	0	0		43.1	69	28
	女性	45	1	19	18	7	0	0	0		41.5	56	26
	計	176	3	71	66	30	6	0	0		42.7		
	女性 比率	26%	33%	27%	27%	23%	0%						

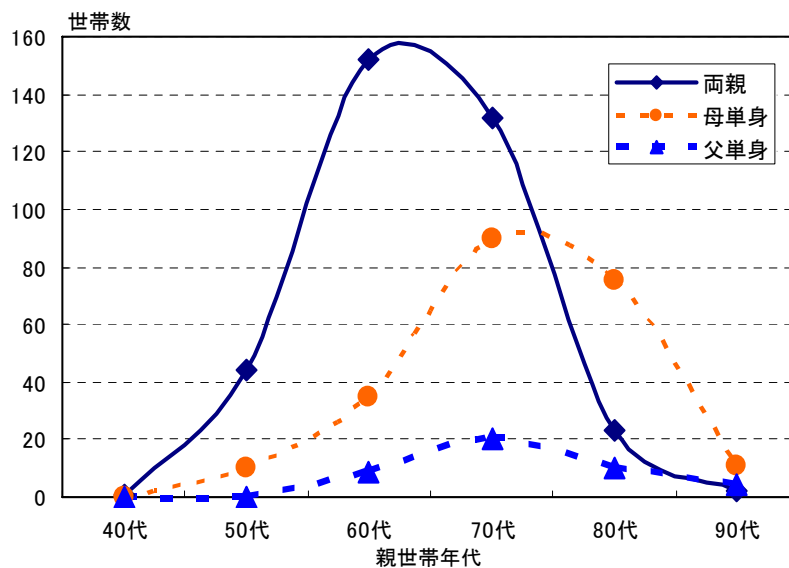
●同居構成の類型化

回答者が親世帯側と子世帯側両方のケースを含むため、回答者から見た同居家族の構成により、下記のように親世帯、子世帯を定義して分析を進めることとします。

同居構成		分類
祖父母・親・回答者	3世代(+孫)	祖父母・親世帯・子世帯*
親・回答者・子	3世代(+孫)	祖父母・親世帯*・子世帯
親・回答者	2世代(+孫)	親世帯・子世帯*
回答者・子	2世代(+孫)	親世帯*・子世帯

* は回答者を含む世帯を示す

全体 N	親世帯年代(両親の場合は母年齢)							年齢(歳)			
	40代	50代	60代	70代	80代	90代	不明	平均	最高	最若	
両親	358	1	44	152	132	23	2	3	68.5	92	49
母単身	229	0	10	35	90	75	11	8	76.5	93	53
父単身	44	0	0	9	20	10	4	1	76.7	99	61



世帯ごとに独立か、共用かで分類

●二世帯住宅の建物分離度

弊社では二世帯住宅をキッチンが2つ、すなわち各世帯にキッチンがある住宅と定義しています。キッチンが1つしかなく、共用しているものは二家族で居住していても、「単世帯住宅」として扱います。

また二世帯住宅のタイプを表現するのに「建物分離度」という概念を用い、以下のように分類します。

- 1) 独立二世帯: 主キッチン、浴室、玄関が各世帯独立であるもの
- 2) 共用二世帯: 主キッチンは各世帯独立であるが、玄関を共用しているもの
- 3) 融合二世帯: 主なキッチンを共用し、どちらかの世帯専用のサブキッチンがあるもの

サブキッチンであるかどうかは、キッチンの大きさによるのではなく、その使われ方に依ります。各世帯に夕食の調理に使われるキッチンがある場合は独立二世帯や共用二世帯、どちらかの世帯で夕食の調理をまとめてしている場合は融合二世帯、または単世帯となります。

独立二世帯は

- 1)-1. 内部で行き来できないもの(建築基準法上、一般に長屋または共同住宅として扱われる)
- 1)-2. 内部で行き来できるもの(同じく、一戸建ての住宅と扱われる)

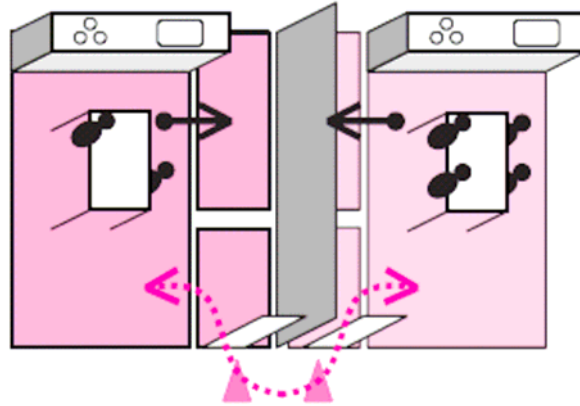
共用二世帯は

- 2)-1. 玄関のみを共用するもの
- 2)-2. 玄関、浴室を共用するもの

にさらに細分化されます。

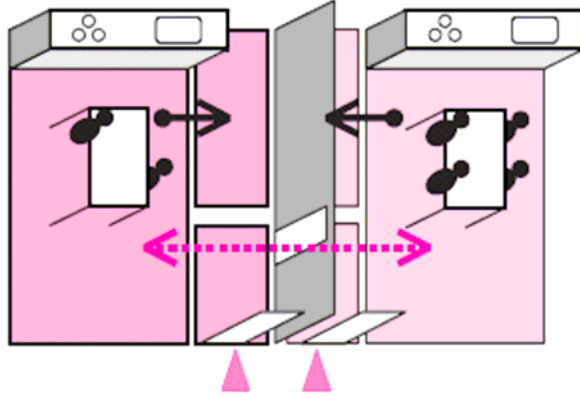
■独立二世帯(外部行来型)

玄関2つ・内部通路なし
(建築基準法上
長屋・共同住宅扱い)



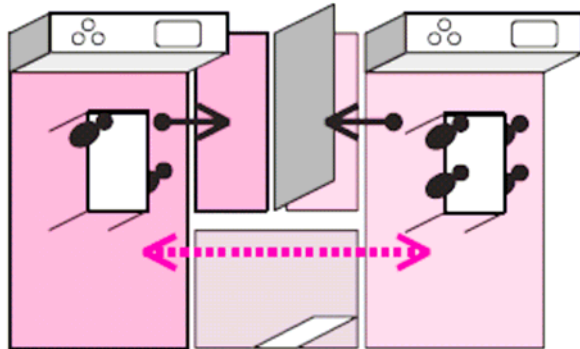
■独立二世帯(内部行来型)

玄関2つ・内部通路あり
(建築基準法上
一戸建て住宅扱い)



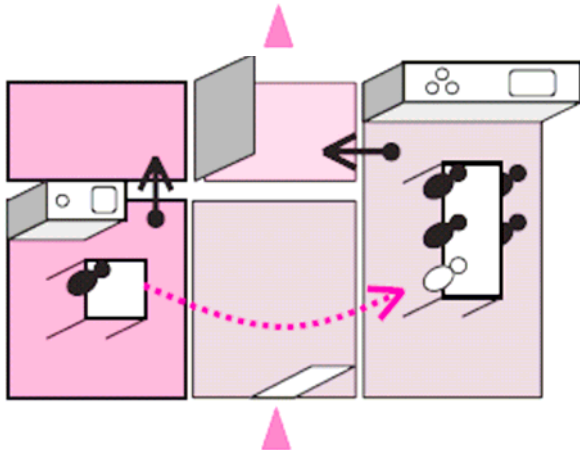
■共用二世帯

玄関1つ・キッチンが独立



■融合二世帯

共用キッチン+サブキッチン



現在親子同居者は9割が同居を予定し建設 親同居想定者は5割が未想定

●現在親子同居者では同居を考慮した住宅が9割以上

現在親子同居者においては、元々新築時から同居をされた方が全体の87%を占め、同居を考えずに建設をされた方は6%しかおりません。よってほとんどの建物の計画は様々な制約の中で、同居に際しての要望を考慮したものになっていると考えられます。

親同居経験者についても、改装によるものも含め同居を想定していた方が8割以上いますが、想定外の同居も2割弱に増えています。築年数を経ているものが多いため、想定外の同居もある程度あったことが想像されます。

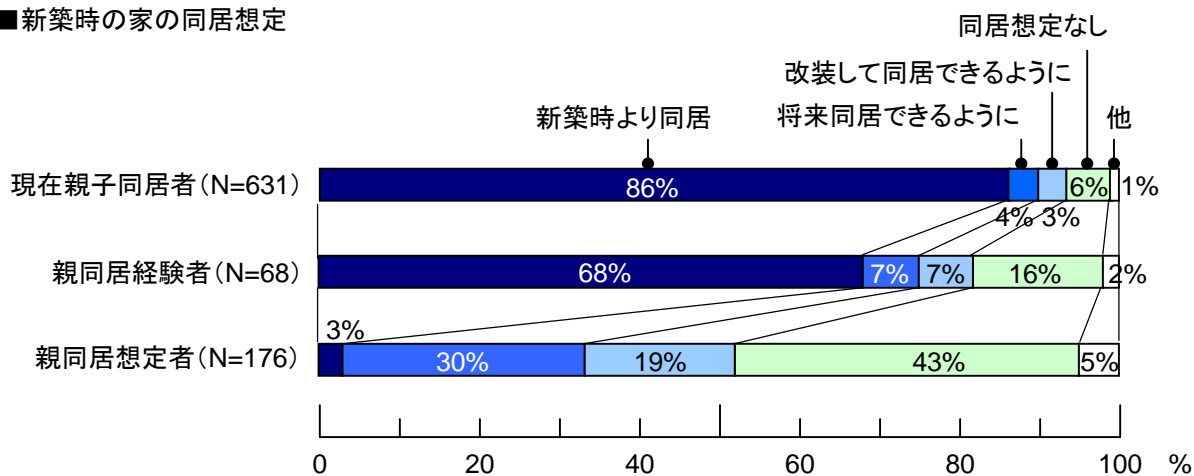
一方、親同居想定者については同居を想定していた方は5割に留まり、築年数が浅いにも関わらず、約半分は建築時に同居を想定していません。

現在親子同居者の建物分離度の分布は二棟建てと独立二世帯を合わせて3割、共用二世帯が3割、単世帯住宅での同居が3割で融合二世帯が1割弱という構成になっています。

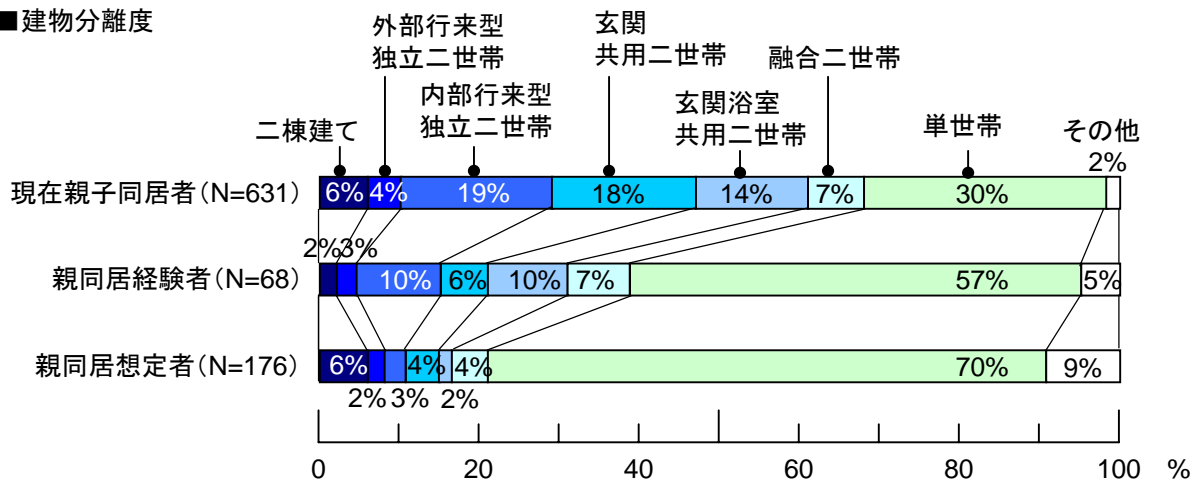
親同居経験者については単世帯が6割近くを占めますが、かつて親子同居の6割は単世帯型の住宅であったことを考えると妥当な結果と言えます。

親同居想定者については7割が単世帯型であり、将来同居する場合にどのような配慮がされているのか気になるところです。

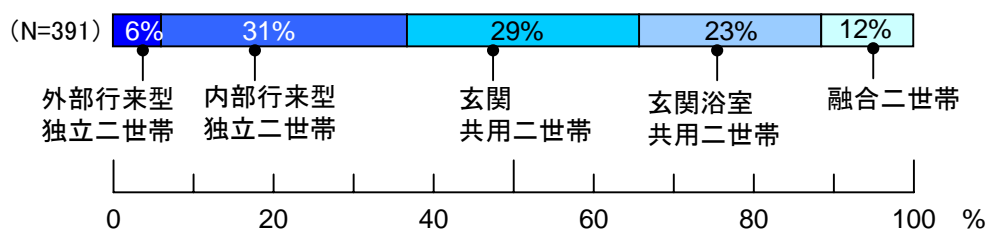
■新築時の家の同居想定



■建物分離度



現在親子同居者のうち、二棟建て、単世帯とその他を除いた、二世帯住宅内での構成比



第二章

親子同居の理由

子世帯の家族変化と 親世帯の加齢への備えが2大理由

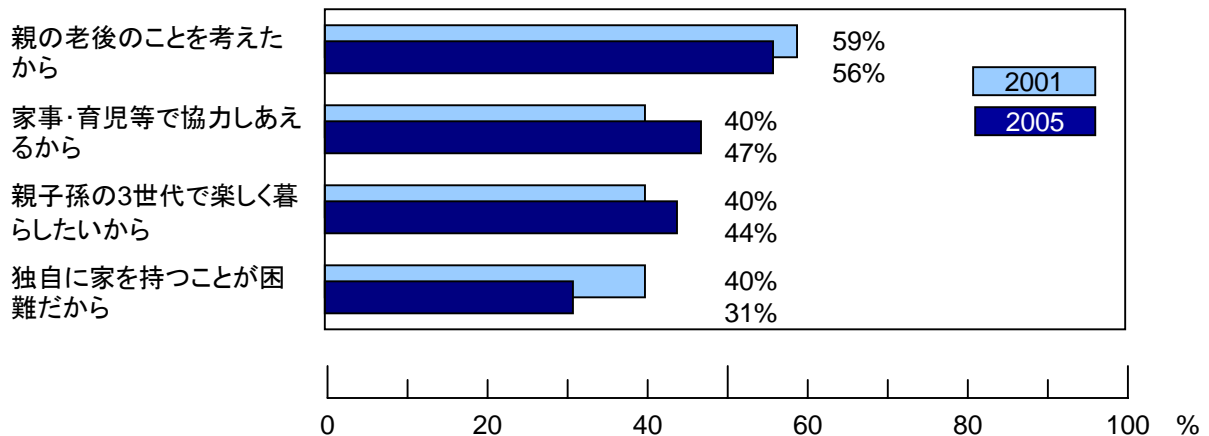
● 2005年調査と同様の傾向

2005年の「二世帯同居・この10年」の調査においては、「親の老後を考えて」が1位、「家事育児で協力しあえる」が2位でしたが、今回の調査においても同様の傾向が見られました。

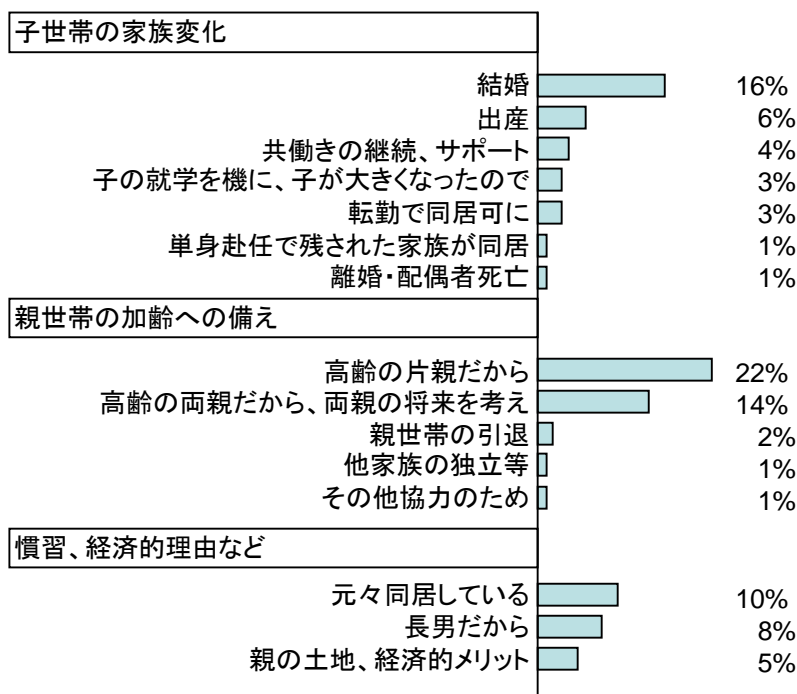
同居の理由を自由回答で記入いただいたものを分析すると、親世帯の高齢、特に片親のケースが目立つこと、子世帯の家族変化、特に結婚、出産をきっかけにするものが目立つことがわかります。

また、元々同居している、長男だから、といった最初から同居を前提としているケースも根強く見られました。

■(参考)同居の理由「二世帯同居・この10年」より 子世帯妻回答



■同居の理由



(自由回答より関連コメント出現率を抽出、無回答、「建替えたから」等を除き%を算出)

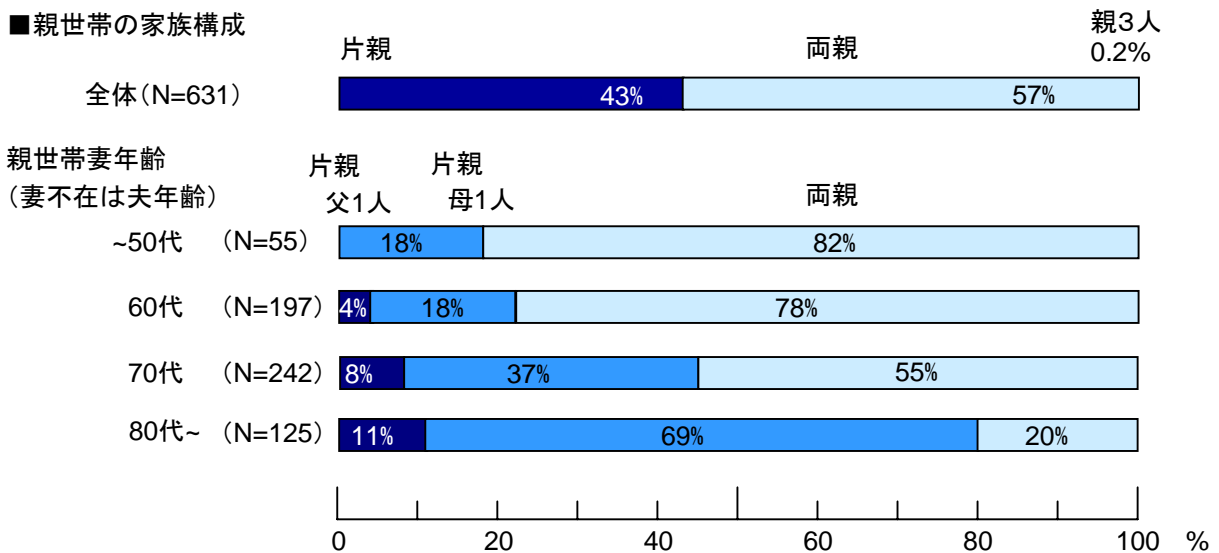
■同居の理由(自由回答例)

<p>育児で協力してもらる</p> <p>共働きで、配偶者の育児休暇が終了すると同時に同居し、子供の世話をお願いする。 共働きのため、子供が幼稚園に入るのをきっかけに、親世帯に送り迎えを頼めるから。 結婚当時は、アパートで夫婦で暮らしていましたが、娘が幼稚園に入園することをきっかけに実家で同居を決めました。 子供にとっても核家族よりは良いと思ったのと、子供の面倒も見てもらえるなどのメリットがあるので。</p>
<p>親の老後を考えて</p> <p>義父が亡くなり、義母が一人の生活になってしまったこと。 義母の家の老朽化が進んでいたこと。 土地が親の所有であり、そこに家を建てるのが安くついたから。 また親の老後を見なければいけなかったから。 母の場合は高齢化。息子家族の場合は経済面のサポート</p>
<p>15年前相続税対策として屋敷内に2世帯住宅として使用することも考えアパートを建築したが、たまたま息子の一人が家から通えるところに就職、 家庭を持ったのでアパートの1戸を使わせている。 母親の高齢化により独居では買い物など日常生活に支障が生じだし、週に1度程度様子を見に行くのではすまなくなってきた。</p>
<p>社会的経済的に</p> <p>夫が長男だったので、将来的に同居するのが確実だったからです。</p>

片親世帯が4割以上を占め、
二世帯合計4人以下の少人数同居が
80代以降の親世帯の5割

● 片親比率は50代、60代では2割、加齢につれて増加し80代では8割に

親世帯が片親の比率は50代、60代では2割程度見られ、加齢と共に比率が増加し、80代では8割に達します。現在片親同居の方の内、約2/3が同居当初からであり、この中には単身の親の存在が二世帯同居のきっかけとなったという回答も多くみられました。

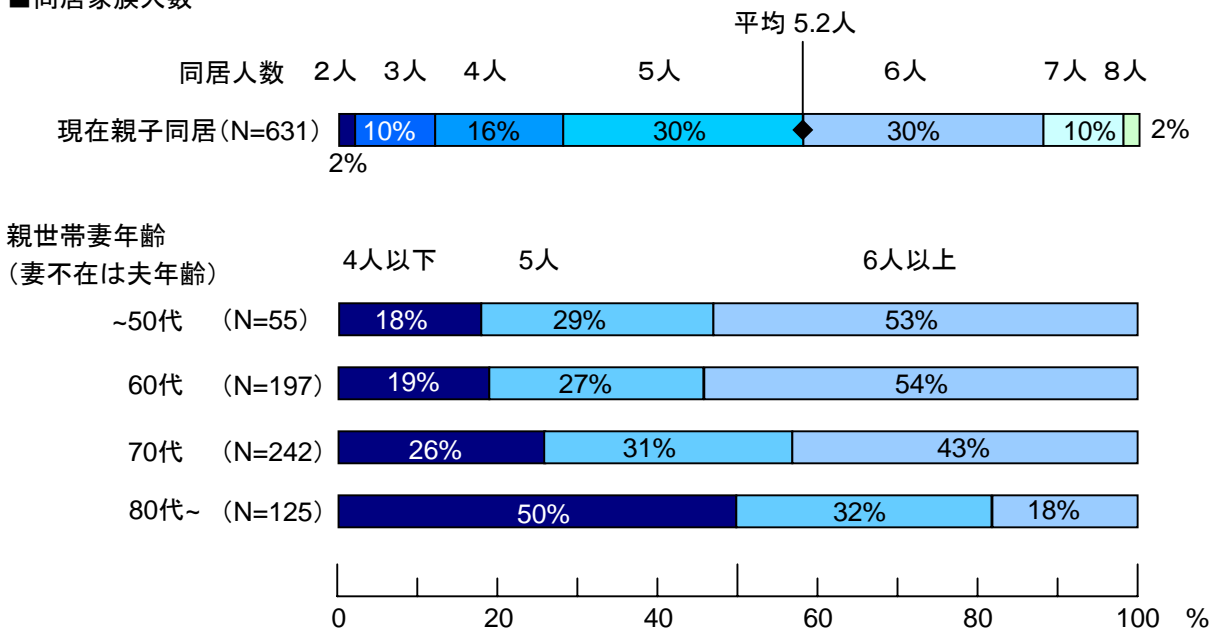


● 80代以降では4人以下の少人数同居が5割に

50代、60代では5割以上あった両世帯6人以上での同居は、片親の比率の増加と呼応する形で減少し、50代、60代では2割以下であった両世帯計4人以下の同居が、80代では5割に達します。

従来親世帯夫婦2人+子世帯夫婦2人+孫1~2人=5~6人家族が二世帯同居の標準的な形と考えられてきましたが、加齢に伴ってこれを下回る4人以下の同居が片親化、孫世代の独立等により増加していくと考えられます。

■ 同居家族人数



頻繁な交流の中で 同居の時期を模索

●片親化や親世帯が自立できなくなった時期を想定

親同居想定者は、どのようなケースになったら同居と考えているのでしょうか。

回答者の平均年齢が40代前半であるため、別居している親世代の年齢も平均69.6歳であり、父で約7割、母は8～9割が健在です。まだ孫世代の独立の時期を迎えている世帯が少なく、家族人数も4人家族が最も多くなっています。

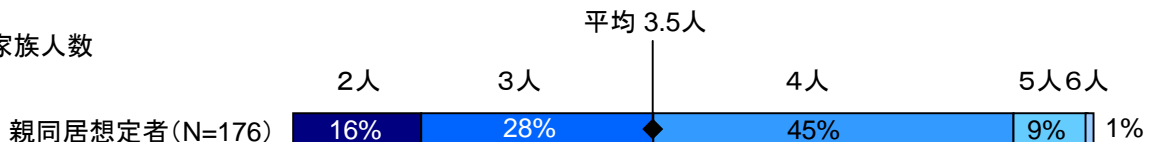
同居するケースの想定は「片親になったら」、「身体不調、要介護になったら」、「親世帯が自立できなくなったら」といった同居せざるを得ない事態を想定していることが多いようです。

交流頻度を見ると月一回以上の交流をしている人が夫の親で4割、妻の親では5割に上り、頻繁な交流の中で同居を模索している様子が見て取れます。現状協力内容では育児協力等子世帯がサポートされている場合の方が多く、親世帯の家の保守や買い物のサポート、やがては介護のサポートへとライフステージが進むにつれ移り変わっていくようです。

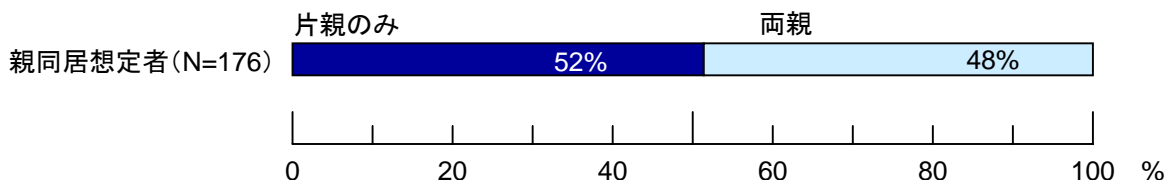
■同居想定親世代

	夫の父	夫の母	妻の父	妻の母	親平均
平均年齢(歳)	71.3	68.8	70.9	68.1	69.6
健在率(%)	66	89	73	84	78

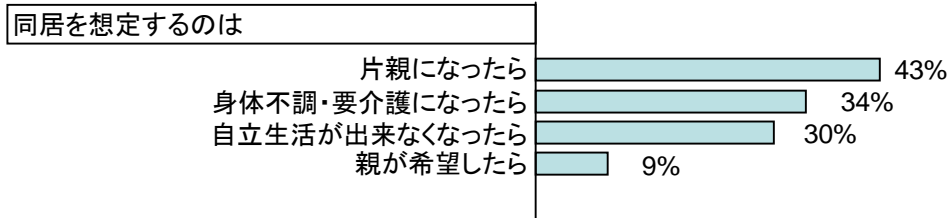
■家族人数



■同居想定

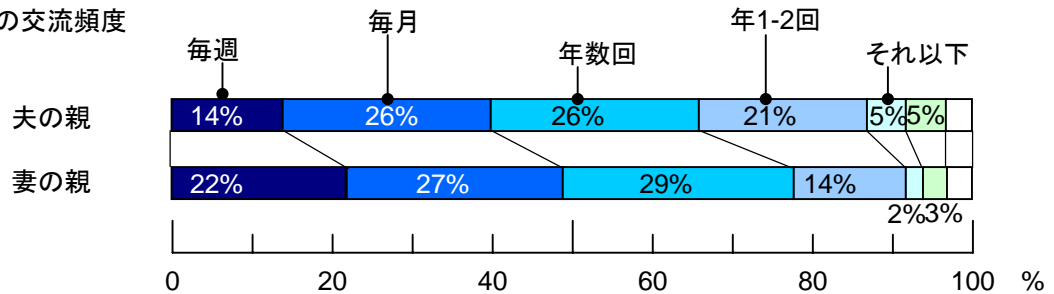


■同居の時期

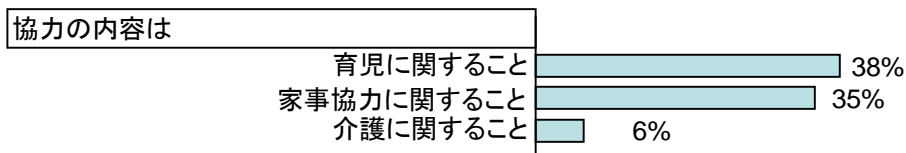


(自由回答より関連コメント出現率を抽出、無回答、「建替えたから」等を除き%を算出)

■別居の親との交流頻度



■別居の親との協力の内容



子世帯への協力	
	現在妊娠中のため、買い物や掃除に来てもらっている。
	我が家は共働きのため、子供が病気等で学校を休まなくてはならない時に主人の両親に来てもらい、面倒を見てもらうときがある。
	私たち夫婦が共働きのため、子どもが体調を崩したときに面倒を見に来てくれます。また、忙しいときなどに家事を手伝ってくれたり、食事を差し入れてくれたりします。
	私(夫)が長期間家を空けるときに、妻が家を空ける用事があるときに孫の世話をするために、親が手伝いに来る。
	孫の世話をしてもらうために親の家まで預けに行く
親世帯への協力	
	週に1回、一緒に外食し、買い物を手伝っている。
	大抵の事は二人で出来るようですが衣替えなどで押入れの中の荷物を移動させる時など手伝いに行きます。
	公的な機関とのやり取り。
	毎週土日に、家族4人で母親の様子を見に出かけて実家で一泊する。食料品などの買い物にいつも車で行き、重い物を実家に搬入する。家に修理や不具合の改善をしたり、相談にのる。反対に、風邪等の病気の子の面倒をお願いすることもある。
	(介護への進行)
	一ヶ月の間、我が家に10日位泊まるという頻度で母がきています。今のところ車で迎えに行き、いろいろと用事を済ませ、また送って行くとボタンで何とか暮らしています。
	要介護5の父を、ひとりで介護している母の負担を少しでも軽くし、話を聞いてあげる。家事を代わってやって、母が外出できるようにする。

死別による親同居解消者が多く 7割は空き世帯部分を利用

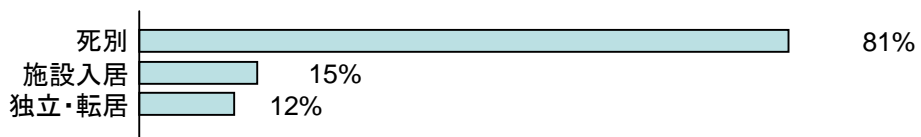
●8割が死別による同居解消

同居解消の理由は8割超が死別であり、施設入居、独立転居がこれに続きます。父母で異なる理由の場合もあり、合計は100%を超える数値となっています。

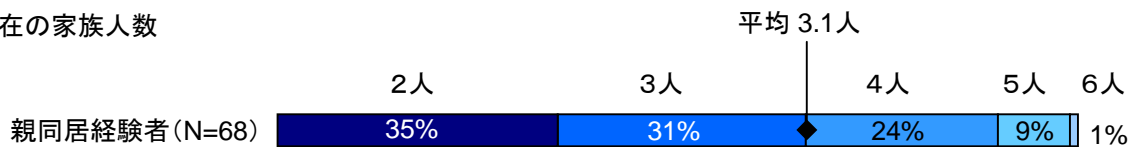
同居解消の結果、家族人数は平均3.1人となっています。

同居していた親は当初から片親であったケースが半分以上を占めました。

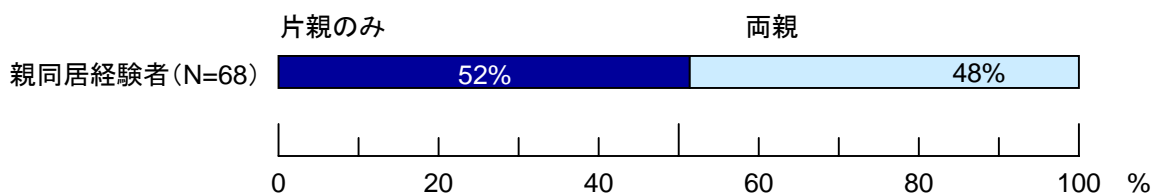
■同居中断の理由(自由回答よりキーワード出現数を抽出)



■現在の家族人数



■同居経験



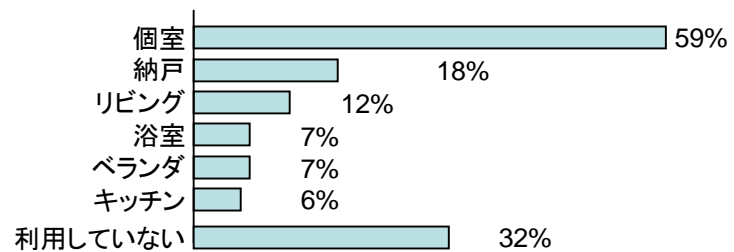
●同居解消後の空間利用

同居解消後、空いたスペースを利用しているかを尋ねたところ、全体の68%は何らかの形で利用しており、利用していないのは32%に留まりました。

利用している部屋は個室が圧倒的に多く6割を占め、納戸、リビングがこれに続きます。浴室、キッチンといった二世帯ゆえに複数必要だった設備は使われることは少ないようです。

■同居解消後の他世帯部分の利用

N=68

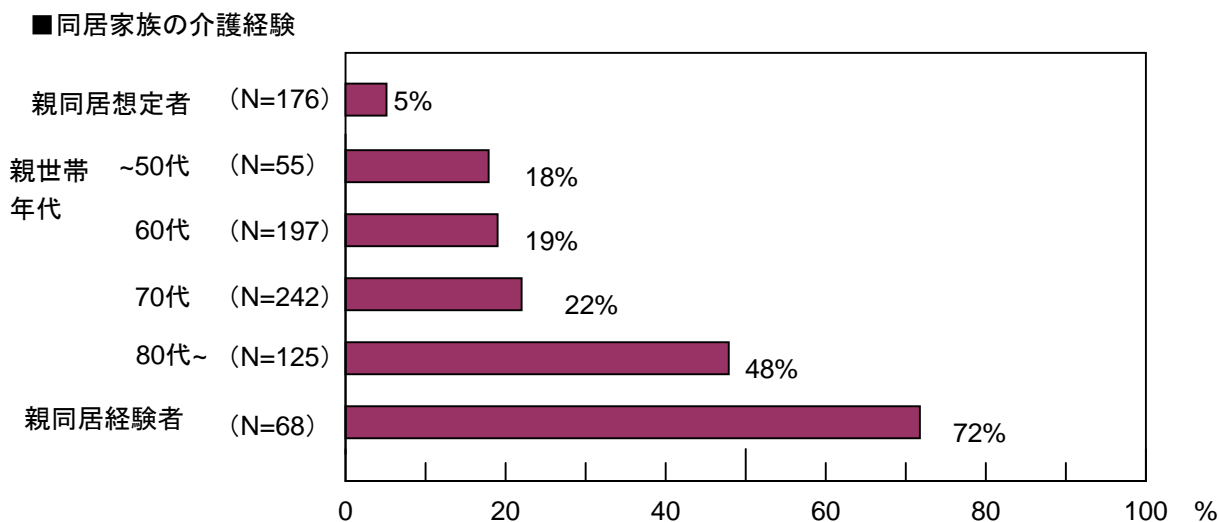
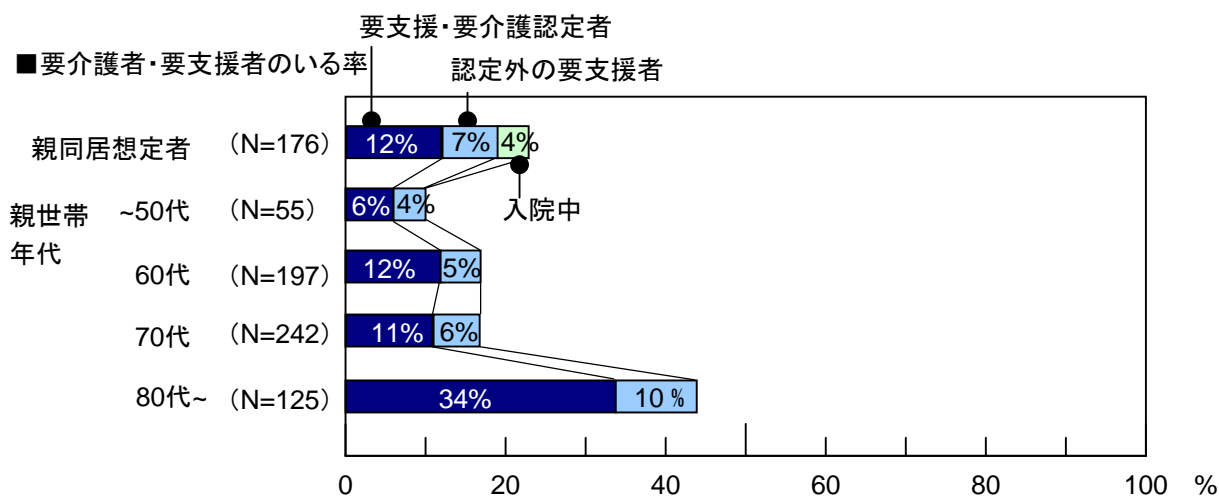


介護経験者は在宅介護サービスに加え 同居家族による世話も

● 加齢に伴い7割以上が介護を経験

同居の理由で多く挙げた、親世帯の老後への備えについて、実態を分析します。

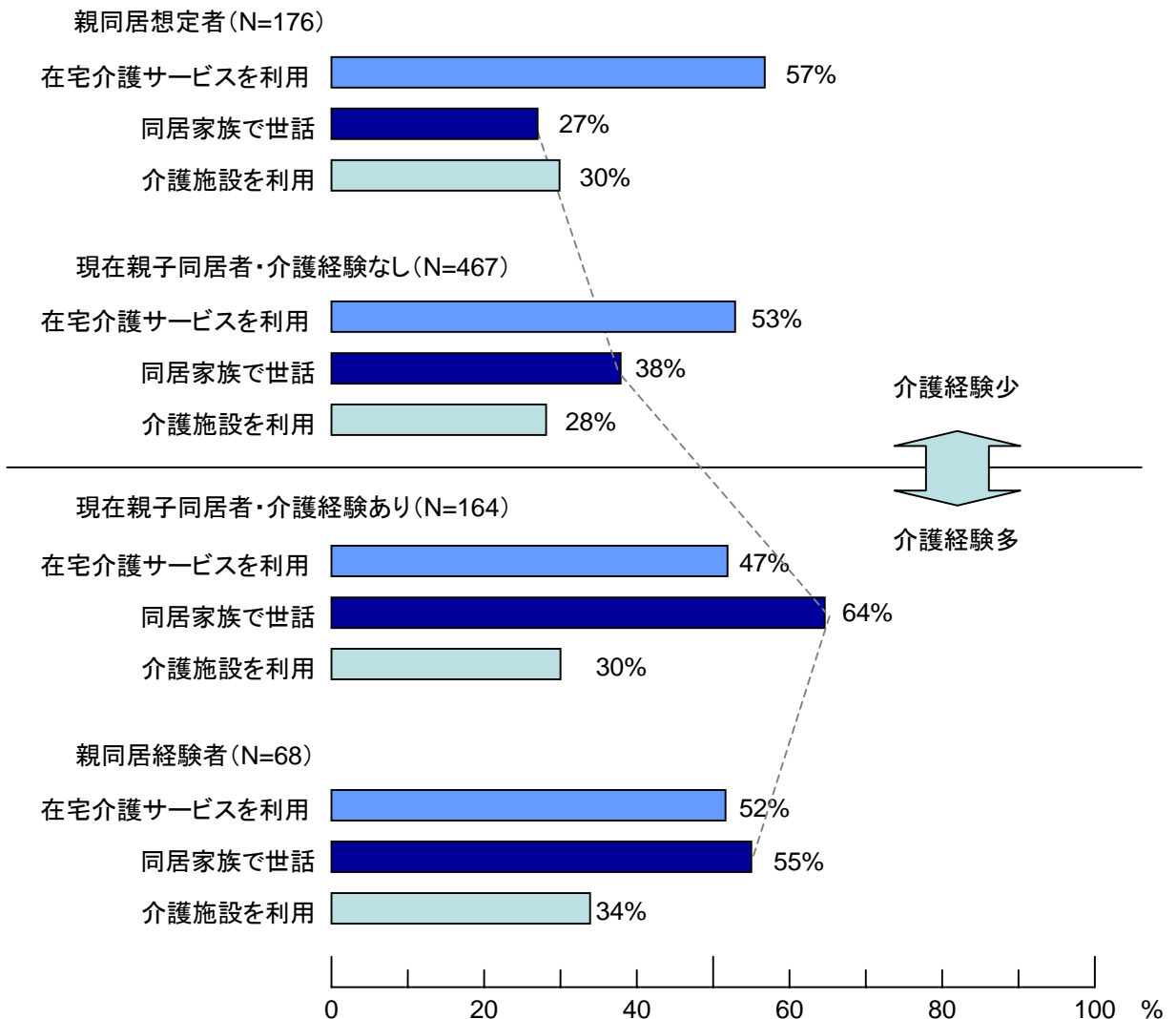
要介護・要支援者の合計は親世帯が50代～70代においては10%～20%ですが、80代になると4割近くで同居家族に要介護・要支援者がいるようになります。同居家族の介護経験者は祖父母介護の経験がプラスされるためか若干高い比率で同様の傾向を示しており、多くは死別により親と同居が終了した親同居経験者においては72%が介護経験ありと回答しています。



● 介護経験者は介護サービスと同居家族の両輪で介護

親同居想定者(介護経験者が5%)、現在親子同居者(介護経験なし)の群と、現在親子同居者(介護経験有り)、親同居経験者(72%が介護経験有り)の群に分けて介護の形態を比較してみると、介護経験が少ない2群が「同居家族による世話」が少ないのに対し、介護経験が多い2群は高いのが注目されます。介護経験が少ない群は在宅介護サービスに強く期待しているのに対し、介護経験の多い群は在宅介護サービスに加え、同居家族の役割も重要と認識しているといえるでしょう。

■ 介護の形態(介護経験者は実態、未経験者は希望を回答)



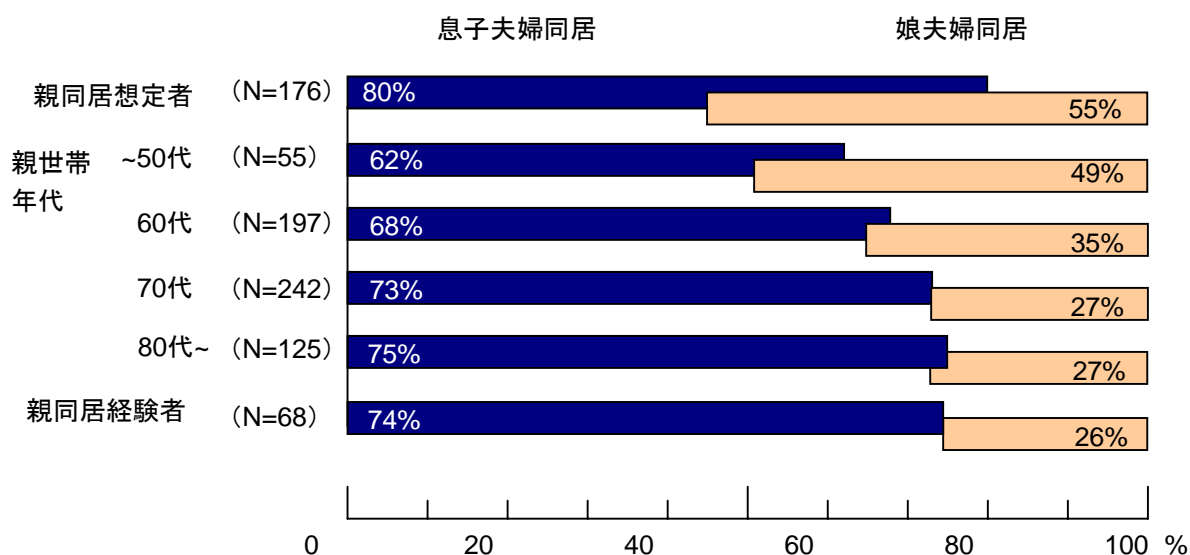
娘夫婦同居の比率は年代が若いほど高まり 長男以外との同居が浸透

● 少子化の中で娘夫婦同居も選択肢に

息子夫婦同居、娘夫婦同居の比率を現在親子同居者について親世帯年代順に分けてみると、年代が若いほど娘夫婦同居が増える傾向にあります。かつての長男夫婦との同居が当たり前だった時代から、次第に娘夫婦同居も対等に検討される時代へと移行していると言えるでしょう。親同居想定者においては、全体の3割は複数のケースを想定しており、グラフが大きく重なっています。

■ 息子夫婦同居・娘夫婦同居の年代別比率

重複があるのは
将来親同居については、両方のケースを想定する場合があるため
3世代同居のケースで祖父母との続柄もあるため(50-60代の親世帯に多い)

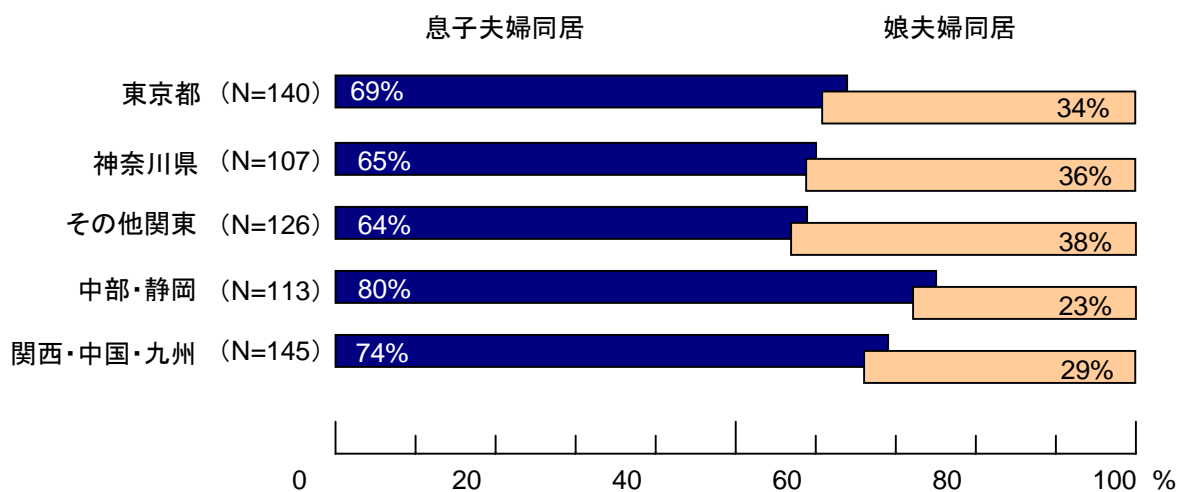


● 中部・静岡では根強い息子夫婦同居志向が残る

息子夫婦同居・娘夫婦同居の比率は地域によって大きく異なっています。

東京を中心とした関東圏では、ほぼ2:1の比率ですが、中部・静岡圏では息子夫婦同居が8割を占める結果となっています。中部・静岡圏では息子、特に長男が同居するという習慣が根強く残っていることがわかります。

■ 地域別 息子夫婦同居・娘夫婦同居の比率



食事や風呂の世話は娘夫婦同居に多い

● 親世帯が50～60代では8割近くは小学生以下の孫がいる

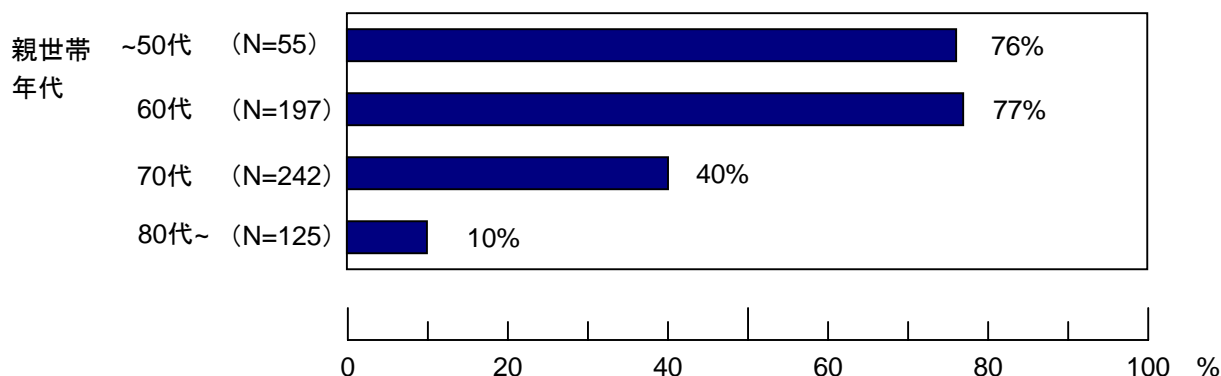
小学生以下の子供(親世帯から見て孫)は、全体の約半分の家庭に居ます。この比率は親世帯年代が50代、60代の場合は約8割あります。

小学生以下の子供が居る場合は親世帯の世話になる機会が多く、「いつも」「ときどき」世話になっているケースが8割近くを占めます。

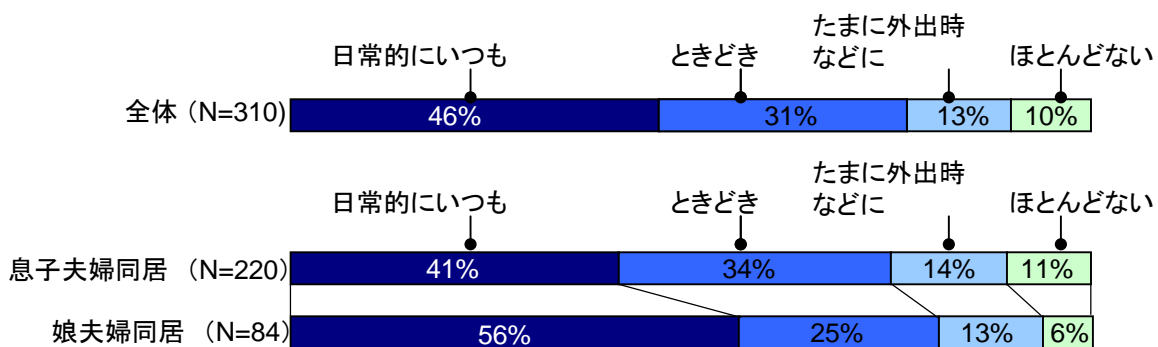
● 娘夫婦、特に共働きの場合は日常生活のサポートを受けることが多い

娘夫婦同居の方が世話になっている頻度が高く、留守、食事、送り迎え、風呂 等の長時間の不在に伴う日常生活のサポート項目が多くなっています。これは娘夫婦同居の場合に子世帯の共働きに伴うサポートを受けることが多いためと考えられます。

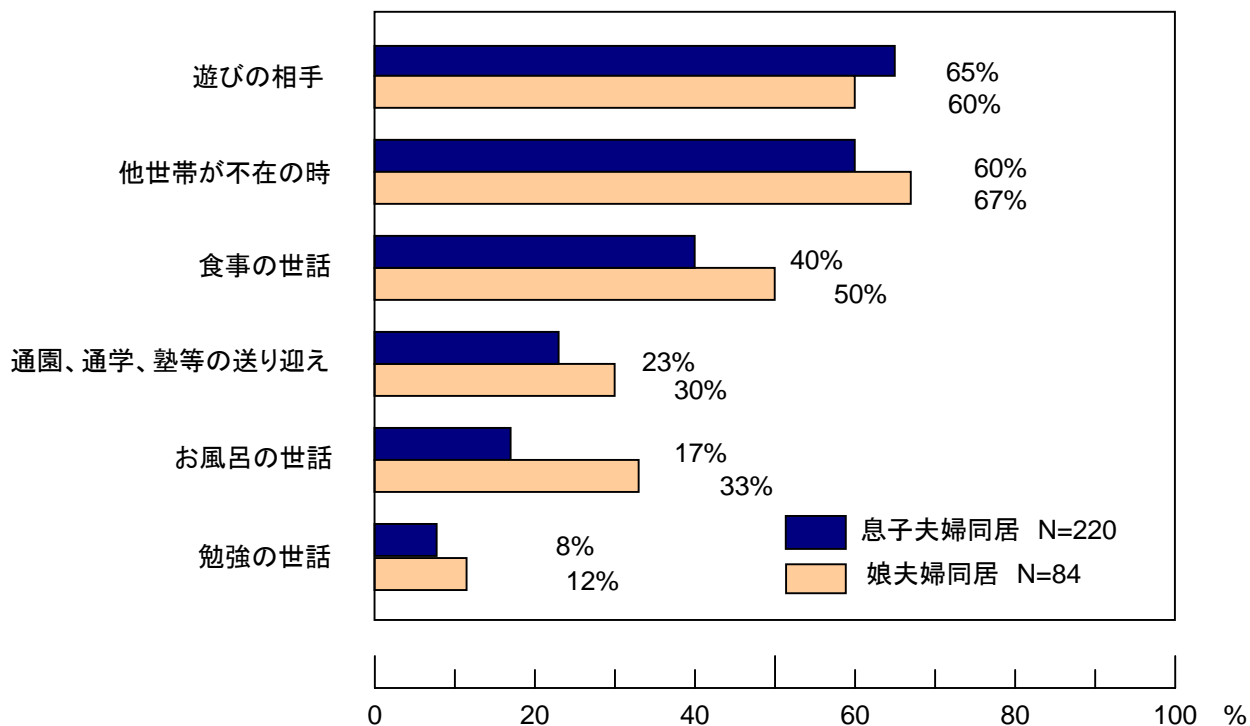
■ 小学生以下の孫世代がいる率



■小学生以下の孫が親世帯の世話になっている頻度



■小学生以下の孫が親世帯の世話になる内容



第三章

同居スタイルと満足度

片親世帯、娘夫婦同居は融合志向が強い

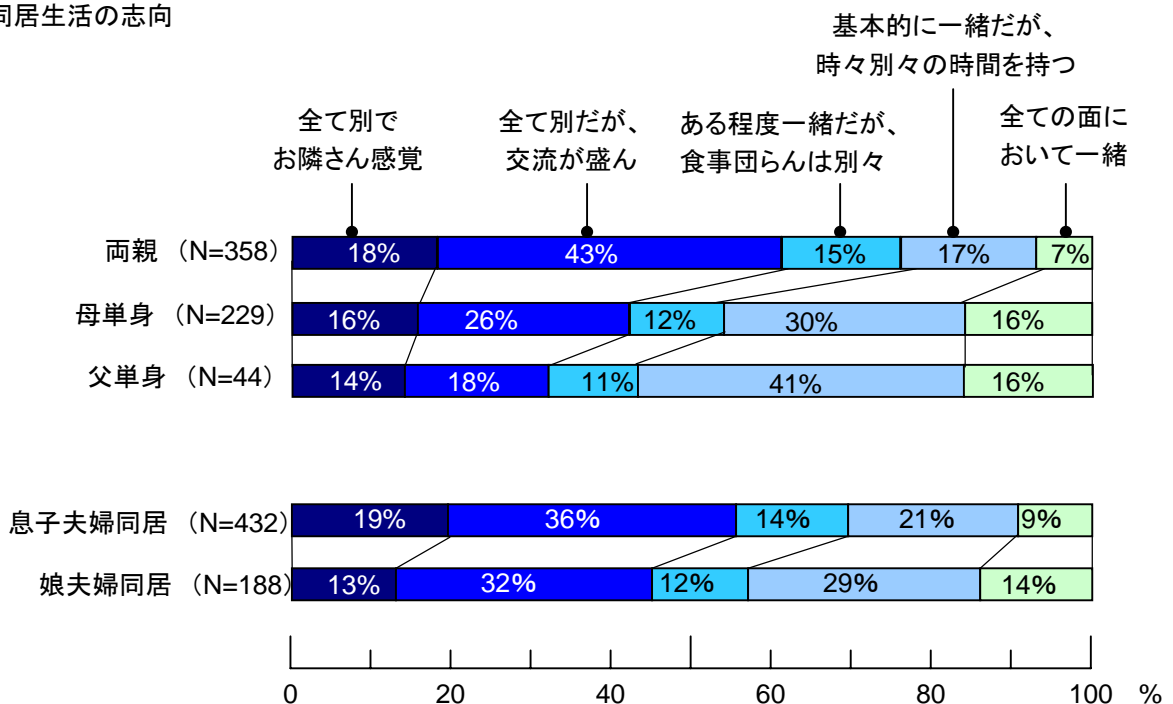
● 家族人数や続柄関係が同居生活の志向に反映

前章で、親子同居の形態が多様化し、従来あまり注目されていなかった片親の世帯や少人数二世帯の比率が大きいこと、娘夫婦同居が浸透してきたことを示しました。本章ではそのような世帯構成の多様化がどのように同居スタイルに反映していくのかを見ていきたいと思います。

親世帯が両親の場合と片親の場合での同居生活の志向の差異に注目すると、両親の場合「全て別」の志向が合わせて6割を占めているのに比べ、片親の場合は「一緒」の比率が高まり、この傾向は母単身の場合より父単身の場合に顕著です。

また、息子夫婦同居と娘夫婦同居を比較すると、全体に娘夫婦同居の方が「一緒」の比率が高く、融合志向が強いことがうかがえます。

■ 同居生活の志向

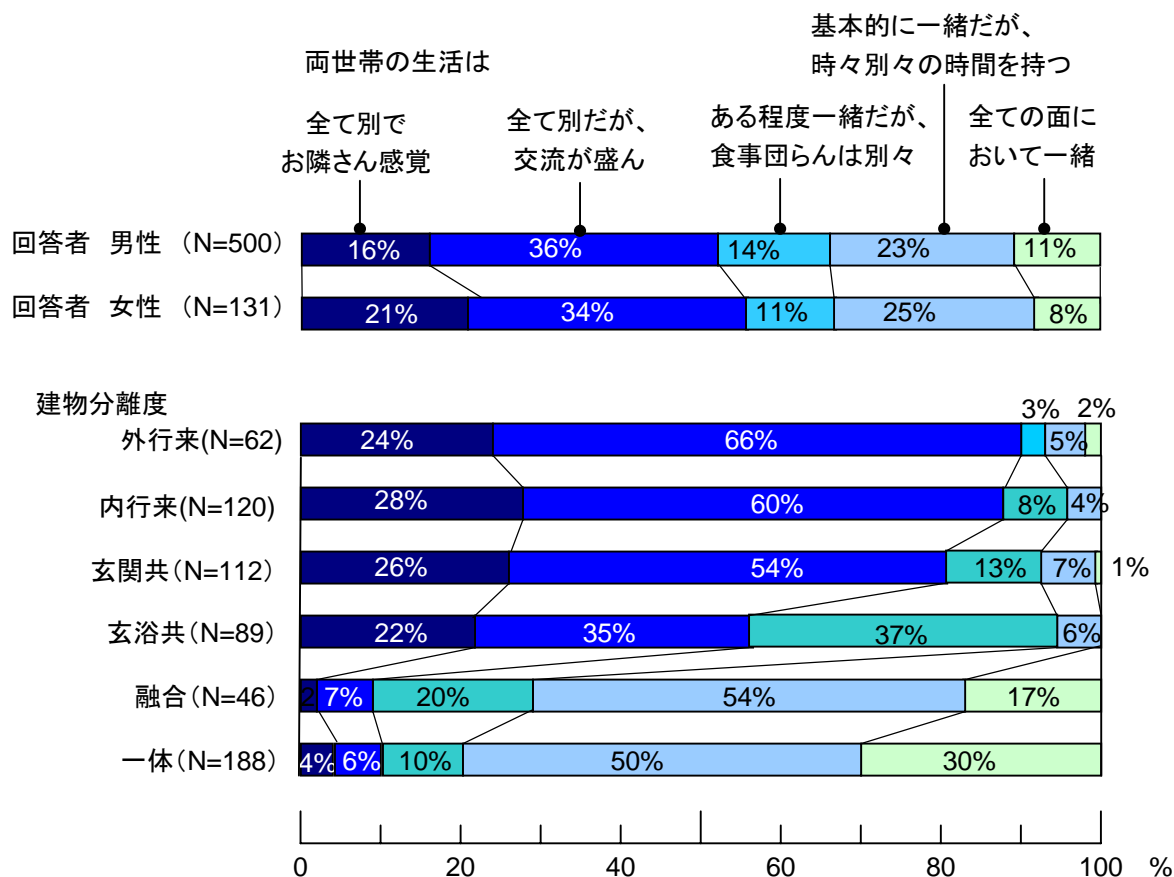


● 同居生活の志向は建物分離度に反映される

同居生活の志向の違いは若干女性の方が独立志向が強いものの、大きな男女差はありません。

同居生活の志向は、要望に合わせて建設された建物の分離度によく反映されています。独立二世帯、共用二世帯の場合は、「全て別」志向が強く、融合二世帯、単世帯の場合は「一緒」が大半を占めるようになります。

■ 同居生活の志向



同居生活の志向は 夕食の独立・融合を左右する

● 夕食融合は片親、少人数同居、娘夫婦同居に多い

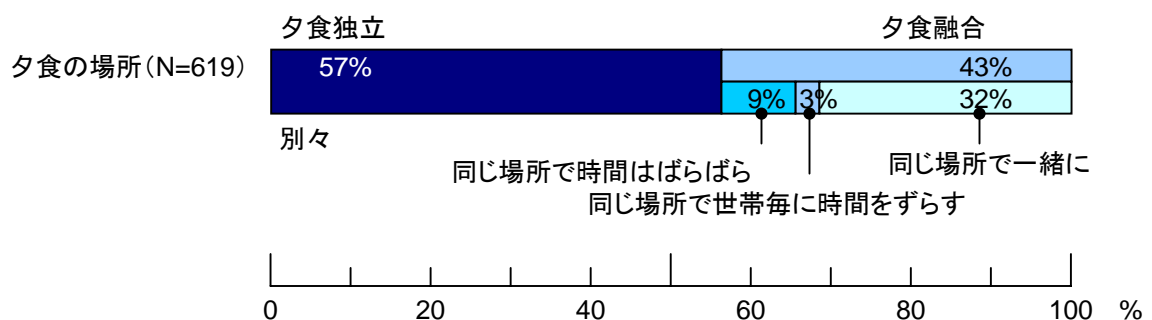
夕食の場所が別々なものを夕食独立、一緒なものを夕食融合と呼ぶことにします。

夕食独立は6割弱を占め、同居生活の志向でも生活は「すべて別」という感覚を持っている人が8割以上に上ります。夕食融合は4割強を占め、同居生活の志向で生活が「一緒」という感覚を持つ人が約8割となります。

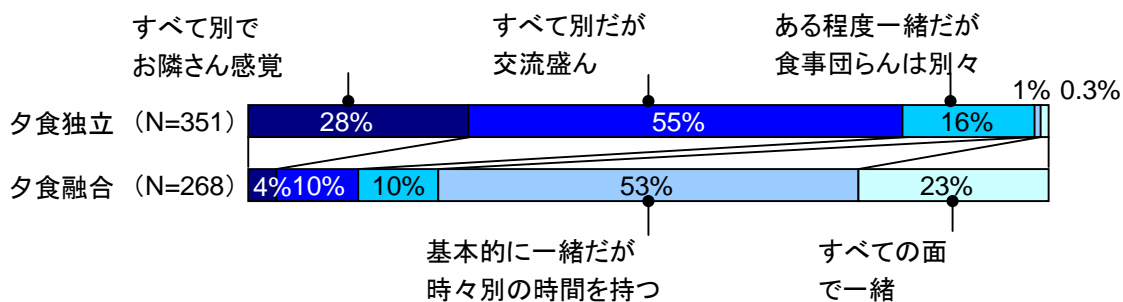
夕食融合は片親、特に父単身の場合や同居家族4人以下の少人数二世帯の場合に多くなる傾向があります。従って親の加齢や、孫世代の独立など、ライフステージが進むにつれて夕食融合へ移行していくと考えることもできます。

また、息子夫婦同居、娘夫婦同居を比較すると、娘夫婦同居の方が夕食融合が多い傾向があります。どのような同居スタイルとなるかは息子、娘のどちらと同居するかを含めて、選択されていると言えるでしょう。

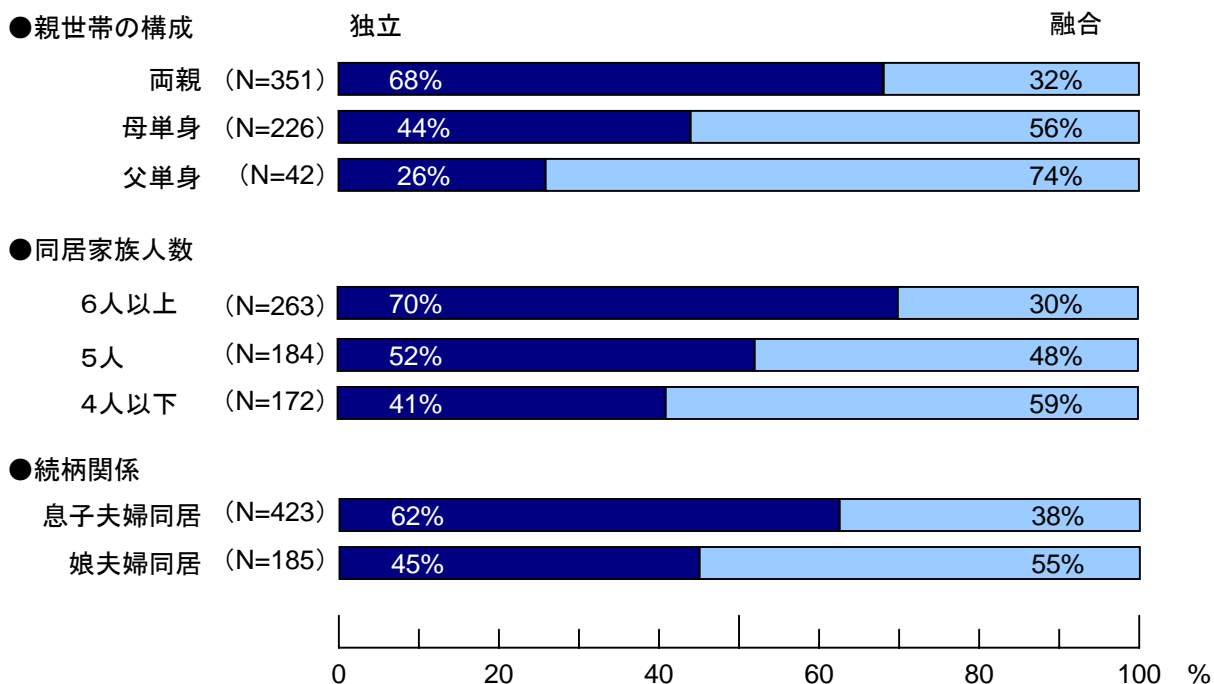
■ 平日最も多い夕食のパターン



■夕食の独立・融合と同居生活の志向



■夕食の独立と融合



夕食の独立・融合で 同居スタイルがわかる

● 夕食の独立・融合に家事、家計全般が連動

夕食の独立と融合は他の食事や家事全般に大きく影響を及ぼし、同居スタイル全般の傾向を決定づけます。

朝食のパターンは夕食のパターンとよく一致しています。夕食が独立なら朝食も別々に、夕食が融合なら朝食一緒の場所でほとんどの場合行われます。しかし、夕食融合でも一緒にしているのは全体の35%に留まり、世帯毎、または世帯と関係なく時間がばらばらとなるケースが全体の約5割を占め、世帯毎の生活リズムの差をうかがわせます。また朝食は別の場所、という回答が12%あり、サブキッチンを利用している群と考えられますが、この中には共用二世帯の回答も多く含まれています。つまり建物形態としては独立したキッチン2つであっても、実際の生活ではサブキッチン的な使い方をするケースも多いと考えられます。

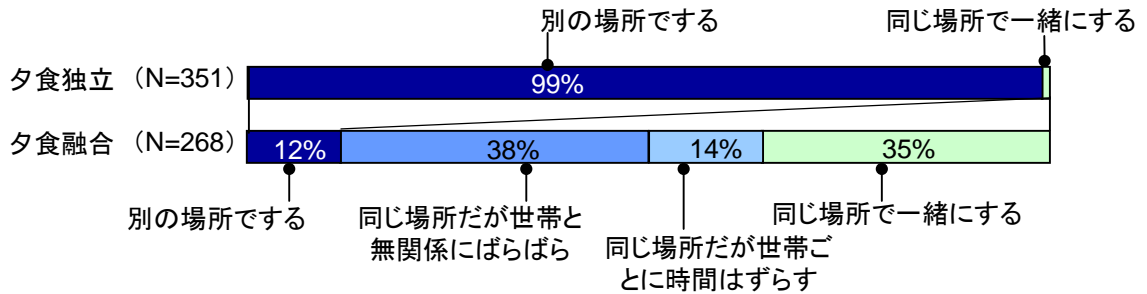
洗濯・物干し、取り込みについても夕食独立ならほぼ別々に行われますが、夕食融合でも時々共同で行うものを含めた「いつも別々」の合計は31%あり、夕食が一緒でも洗濯は別々に、という同居スタイルの存在を示しています。

また、夕食独立なら、世帯毎のインターホン呼び出しが約7割となり、夕食融合なら1割に留まる、というも面白い傾向です。夕食独立の場合は自世帯内でのみ呼び出し音が鳴れば足りませんが、夕食融合の場合は他世帯のスペースに居ることもあるため、両方のリビングで呼び出し音が鳴る必要があると考えられます。

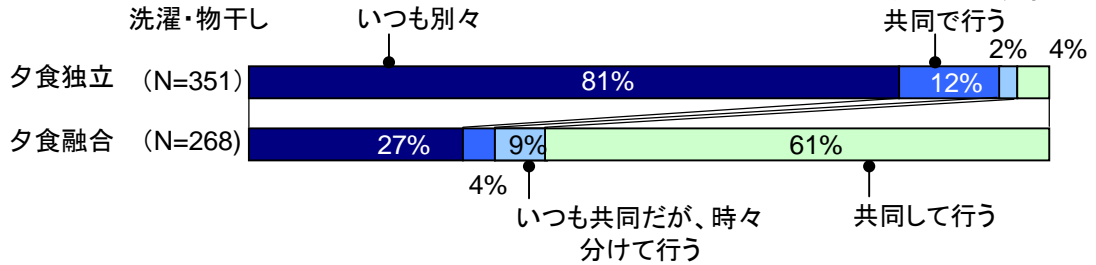
電気料金の支払いについて尋ねたところ、夕食独立なら世帯別、夕食融合なら片方で負担、という傾向も見られました。夕食を一緒にする以上家計はある程度一体化しているはずですが、それでも26%は一定割合を両世帯で負担するなどの方法で世帯毎の支払いをしていました。

このように、夕食の融合は必ずしも他の生活行為すべての融合を意味しません。夕食融合であっても朝食、洗濯や来客対応、光熱費の負担など世帯単位で行われるものは多くあり、協同部分を持ちながらも世帯毎に自立していることを感じさせます。

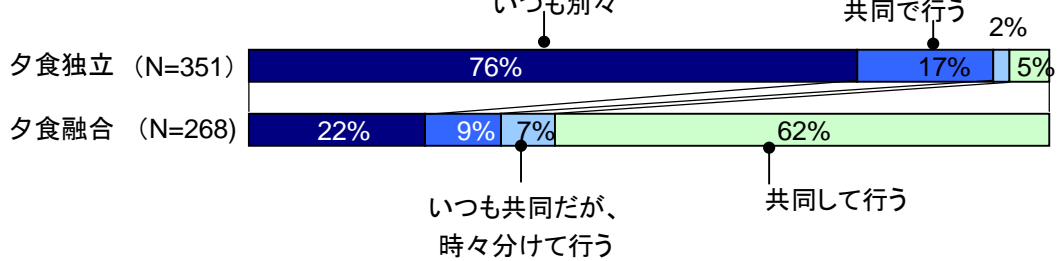
■ 平日最も多い朝食のパターン



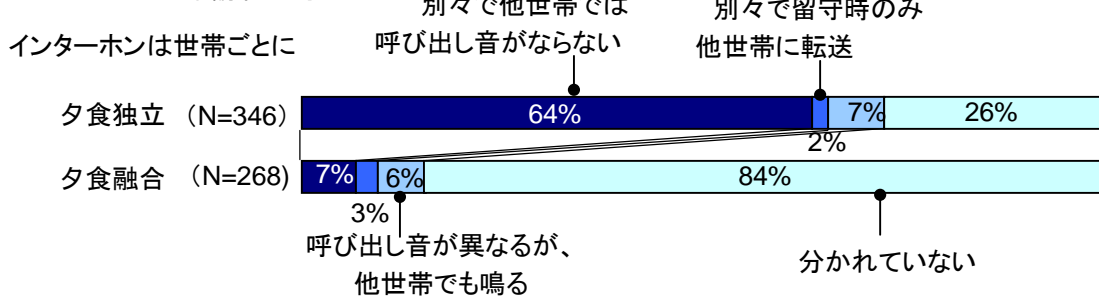
■ 洗濯・物干し



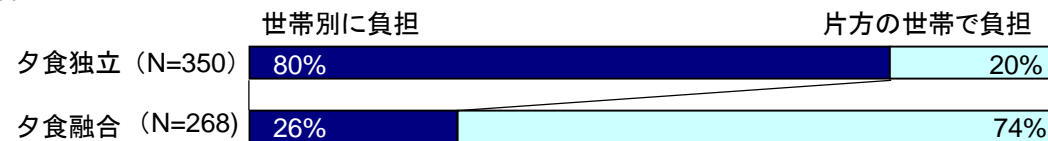
■ 洗濯物の取り込み



■ インターホンでの来訪者応対



■ 電気料金



0 20 40 60 80 100 %

夕食独立なら独立二世帯
夕食融合なら融合二世帯
の満足度が高い

● 夕食独立の場合は内部行来型独立二世帯に要望が集中

前項では夕食の独立・融合が同居スタイル全体を決定づけることを示しました。本項では夕食の独立・融合に代表される同居スタイルの違いに合わせた二世帯住宅の設計について触れます。

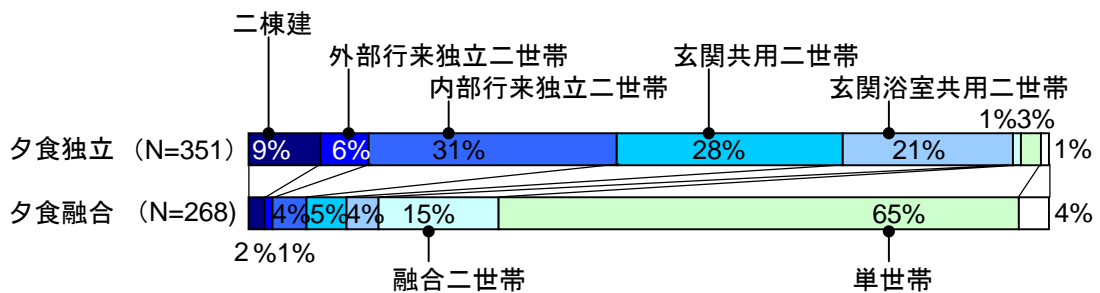
建物分離度は夕食独立の場合は、独立二世帯または共用二世帯に、夕食融合の場合は融合二世帯または単世帯にと大きく2つに分かれています。それぞれの建物分離度を選択した居住者は現在もし可能ならどのような分離度を希望しているのでしょうか。

希望の建物分離度は独立二世帯の場合は現状と同じ建物分離度が大半を占めるものの、外部行き来型には内部行き来型への希望が目立っています。これは世帯間の協力、特に介護の場合は特に夜間内部行き来ができることと便利であることが影響しています。

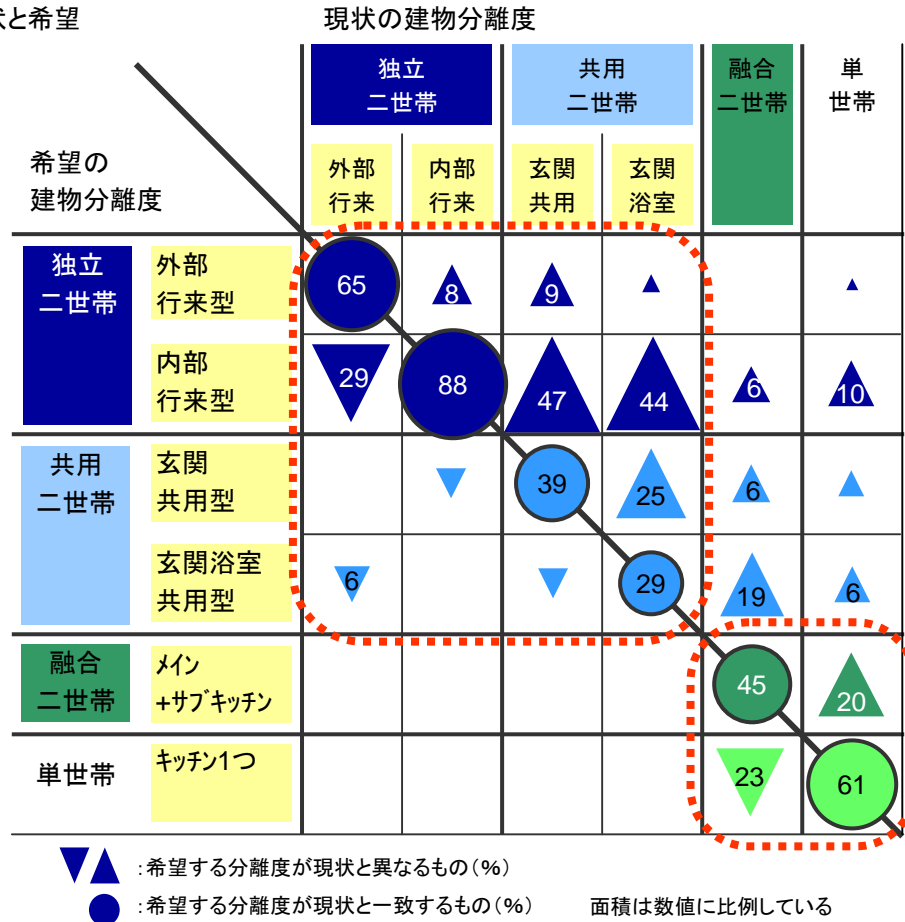
共用二世帯の場合は全体により分離度の高い方向へ希望がシフトする傾向が見られます。特に浴室共用の場合は現状分離度を希望する比率が3割を切り、内部行来型独立二世帯への要望が多くなっています。浴室の共用は敷地や予算の制約によることが多いためと思われます。同居満足度を建物分離度別に見ても、大変満足は外部行来型、ほぼ満足までの合計では内部行来型が満足度が高いという結果となっています。

融合二世帯はほぼ現状を希望するものを中心に分布し、単世帯はやや融合二世帯にシフトする傾向が見られます。同居満足度も融合二世帯の方が高く、サブキッチンの重要性がうかがえます。

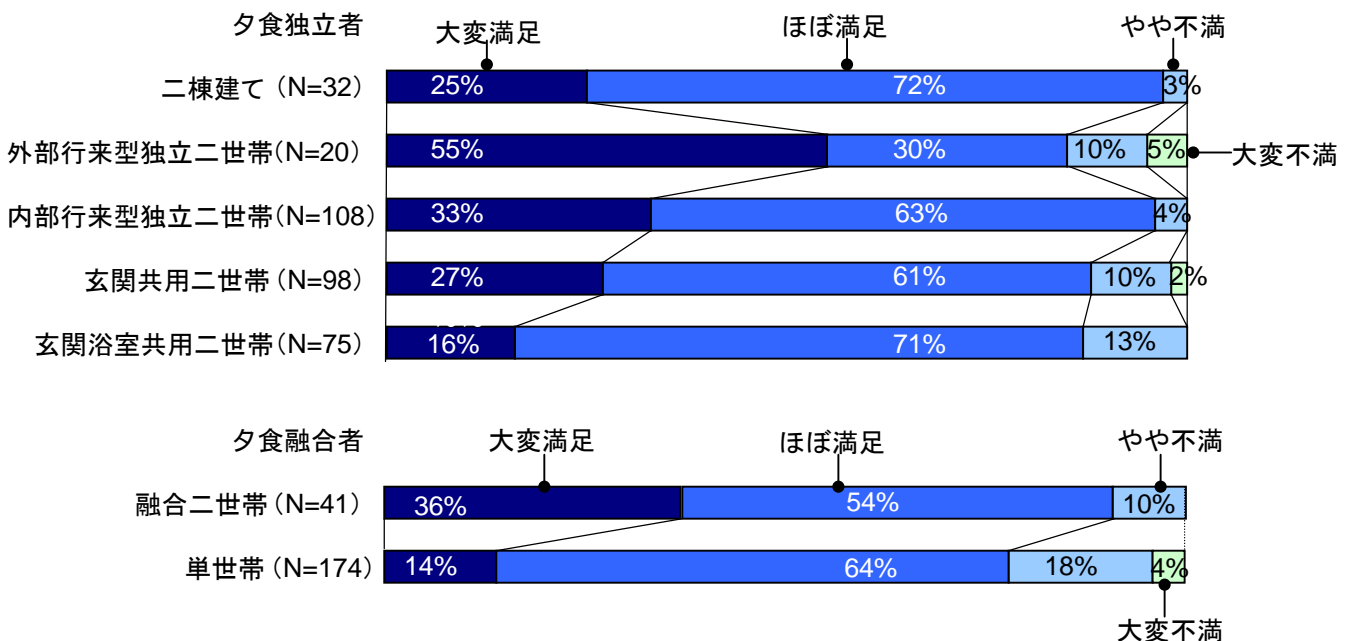
■ 夕食独立者・融合者の建物分離度



■建物分離度の現状と希望



■現状の建物分離度別 同居満足度



第四章

同居スタイルに合わせたプランニング

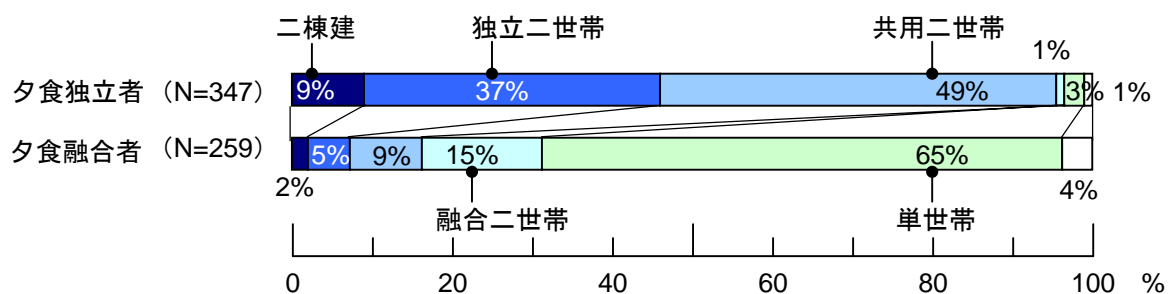
夕食独立なら玄関・浴室も独立に 夕食融合でもサブキッチン

● 同居スタイルに合わせた分離度に

夕食が独立か融合かによって、選ばれる建物分離度の分布は大きく異なっています。

夕食独立の場合、世帯間のプライバシーを守り、それぞれの生活リズムを保てる独立二世帯や共用二世帯が多く選ばれています。夕食融合の場合、融合二世帯や単世帯が多く、両世帯が集まるダイニングの広さが必要であり、サブキッチン、サブリビングが良かったという意見が多く聞かれました。

■ 夕食独立者・融合者の建物分離度



■ 建物で配慮して良かったこと、配慮すべきだったこと

夕食独立	敷地内別居型の同居にすることにより、お互い気兼ねなく生活でき、庭や駐車場などは共有のため、お互いの気配を感じることもでき、よかったと思う。(二棟建て)
夕食独立	良い・・・完全分離二世帯なのでプライバシーが守れる。
夕食独立	配慮があれば・・・内部階段もあっても良かったかなあと。冬場の夜間の世帯間移動が寒い。(外部行来型独立二世帯)
夕食独立	良かった事：母親が介護「要支援」となった時に、独立した生活でありながら、必要な時は何時でも支援・交流ができる二世帯住宅の設計にした事。(内部行来型独立二世帯)
夕食独立	玄関、フロ、キッチン、すべてを別々にしたことは本当によかった。
夕食独立	経済的には不利でもこの件は妥協しなくて良かったと思う。(内部行来型独立二世帯)
夕食融合	浴室、キッチンをそれぞれの世帯ごとにつけたことはよかった。(夕食を一緒にとる)主として使うリビングをもっと広くとればよかったと思う。(玄関共用二世帯)
夕食融合	当初は基本的に各世帯単位で生活する予定だったが、子供が生まれると(子供の保育を協力してもらい必要上)親世帯が子世帯で過ごす時間が多くなり、居間、キッチン、トイレ、風呂についてはほぼ子世帯しか使われなくなった。結局、親世帯は実質寝室しか使われない有様で、そのほかのスペースが非常にもったいない。一方子世帯は、子供が生まれ、親世帯が入り浸り・・・で過密状態。こんなことを想定して、各世帯のスペースの配分を考えるべきだったと後悔。特に、キッチンに3世代が入ると非常に動きづらい。ここも最初から親世帯をサブキッチンとして簡易なものにして、子世帯を主キッチンとして3世代が協力して調理をできるような広いキッチンに設計すればよかった。(内部行来型独立二世帯)
夕食融合	(良かったことは)老人用のミニキッチンを設置したこと。(融合二世帯)
夕食融合	子世帯にサブリビングは本当によかったと思います。解放されたいときがありますから(融合二世帯)

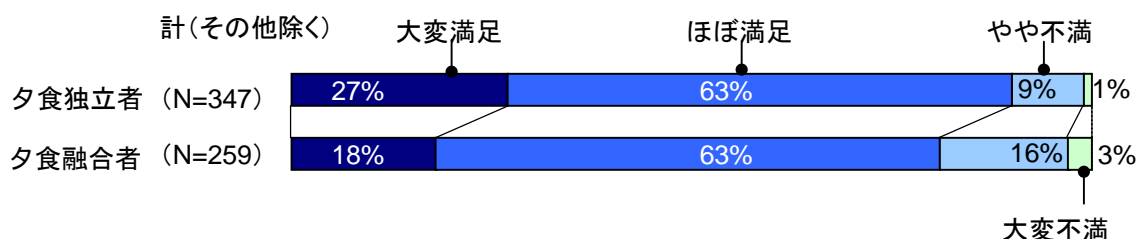
● 食事の準備だけではないキッチンの使われ方

前章において、夕食融合の場合、融合二世帯の比率が低いものの同居満足度はほぼ満足までの合計が9割に達し、独立二世帯を志向する夕食独立の場合と異なっていました。夕食一緒の場合でもサブキッチンがあると満足度が上がる理由は何でしょうか。

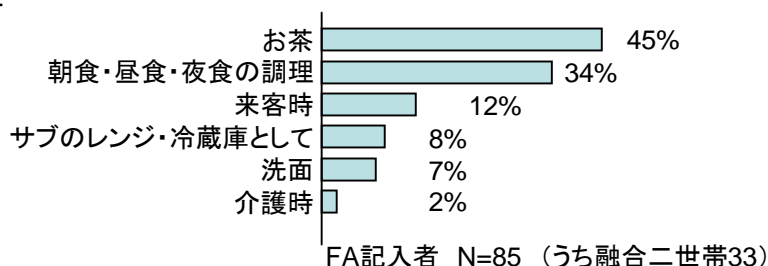
キッチンは食事の調理だけではなく、お茶、来客の対応等様々な用途に使われています。夕食という家族全体の集まる場以外に、各世帯がそれぞれの生活リズムで暮らしていくために、サブキッチンが便利に感じられるようです。

また、介護の際の流しや、ヘルパーが使用するキッチンとして、親世帯側にサブキッチンが欲しいとの意見も寄せられました。

■ 夕食独立者・融合者別同居満足度



■ サブキッチンの使い方



姑は要介護1ですが、歩行が可能なので朝食と昼食(デイホームに行かない日)は、ご自分の部屋のキッチンで調理をしております。

身体のリハビリと散歩をかねた買い物と、ご自分の好みの食べ物と、好きな時間帯に食事がとれるので、自然にこの形になりました。(玄関浴室共用二世帯)

主キッチンを利用しない深夜、早朝のみサブキッチンを使用(融合二世帯)

お茶をいれる、湯たんぽの湯沸かし、室内の植木の水やり(融合二世帯)

母に客が来たときのお茶を入れるのに使用。(融合二世帯)

介護人の部屋に、ミニキッチンがあればヘルパーさんなども使い易かったと思います。お茶を入れたり簡単な食器の洗い物など(同居の理由:母が重度のアルツハイマーになったため)(単世帯)

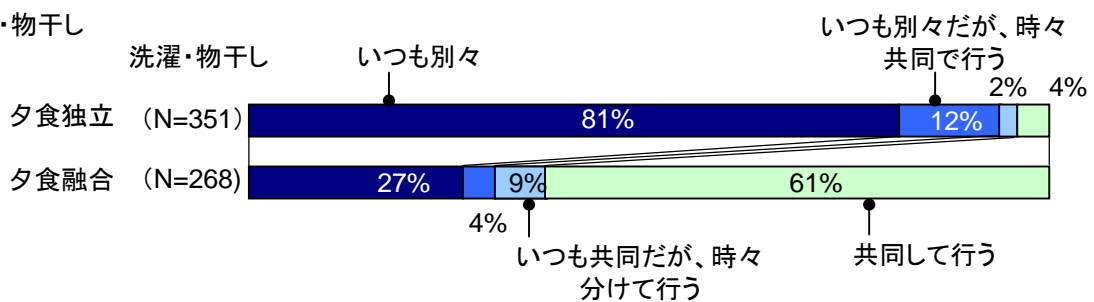
融合二世帯でも 3割は別々に洗濯

● 夕食独立・融合と洗濯機の分離の関係

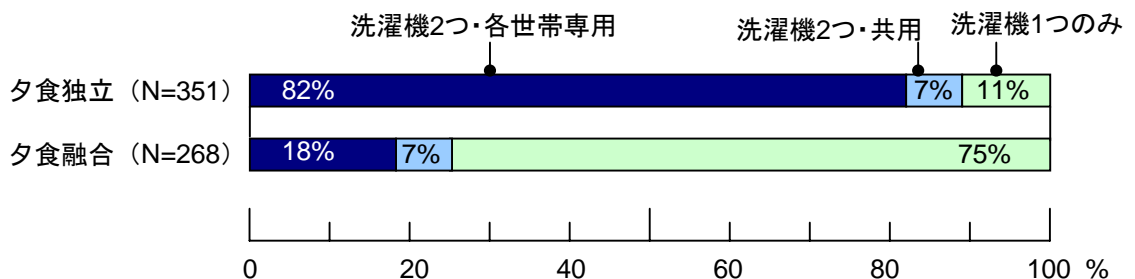
夕食を別々にとるか、一緒にとるかという生活スタイルと、洗濯機の分離度との関係は、夕食別々の場合、82%は各世帯専用の洗濯機を持ち、夕食融合であっても約20%は別々に洗濯機を設置していることが分かりました。

これは、洗濯のやり方(一槽式・二槽式の違い、使用する洗剤の違いなど)や、洗濯をする生活時間帯が世帯で異なることなどが原因として考えられ、二世帯同居において、洗濯という行為は夕食以上に独立性が高い可能性を示しています。

■ 洗濯・物干し



■ 洗濯機の数現状



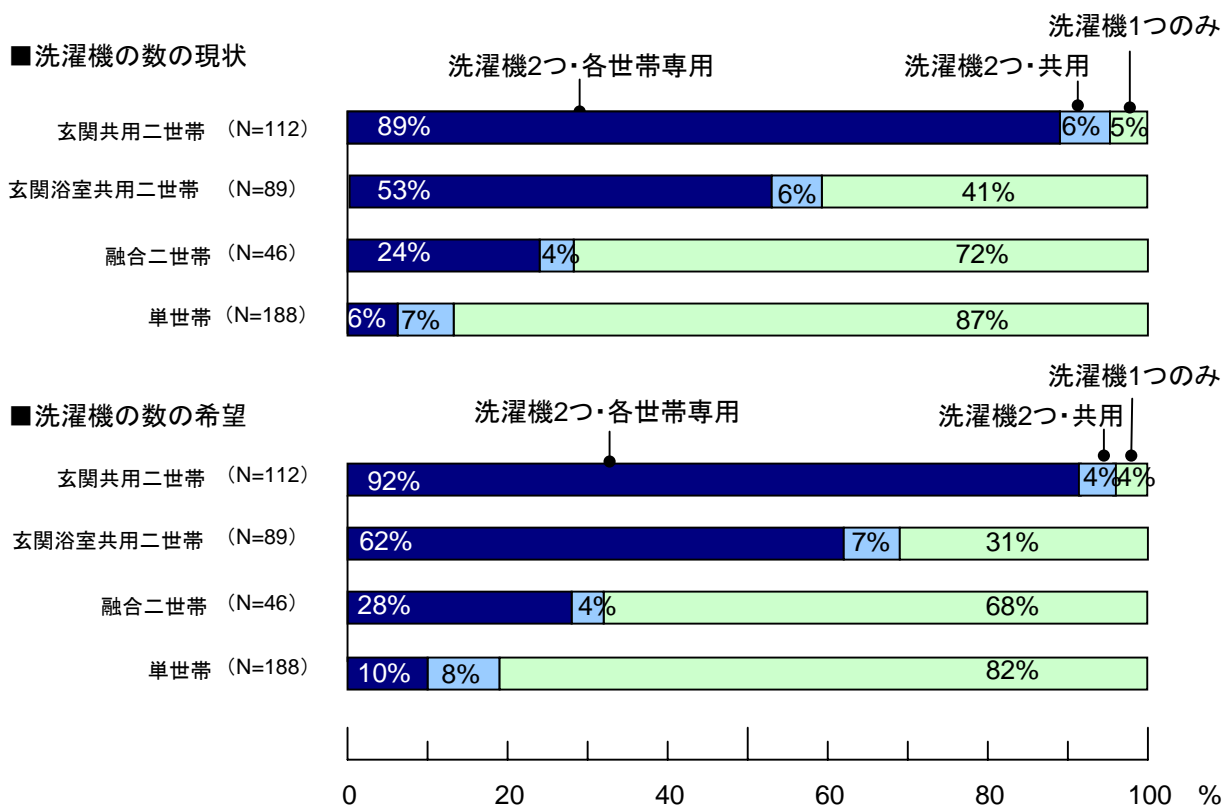
● 建物分離度と洗濯機の分離の関係

洗濯機の分離を建物分離度との関係でみると、玄関のみ共用するタイプ(玄関共用二世帯)では、浴室と洗面所が世帯ごとに別々なことから約90%はそれぞれの世帯で専用の洗濯機を保有しています。また玄関と浴室を共用するタイプ(玄関浴室共用二世帯)でも53%が、主なキッチンまで共用する融合二世帯でも24%は別々の洗濯機を利用していることが分かりました。

また、洗濯機の数の希望をみると、玄関浴室共用二世帯では約60%、融合二世帯では約30%は洗濯機を2台にしたいと考えており、実際に分離している数字を上回る結果となっています。これは分離しなかったことに対する不満が少なからずあるということを示しています。

これらの調査結果は、洗濯という行為は二世帯住宅の中で分離する優先順位が極めて高いことを示しています。また洗濯機の設置には給排水工事や電気工事を伴い、後から追加設置することは簡単には行きにくい実情もあり、当初より計画に盛り込む必要性もあります。

今後の二世帯住宅では、浴室を共用する場合でも、洗濯機は基本的に別々に計画をする必要があると考えられ、生活の融合度が高い夕食融合の二世帯であっても、洗濯機を共用するか否かは設計時の重要なポイントになるということが言えます。



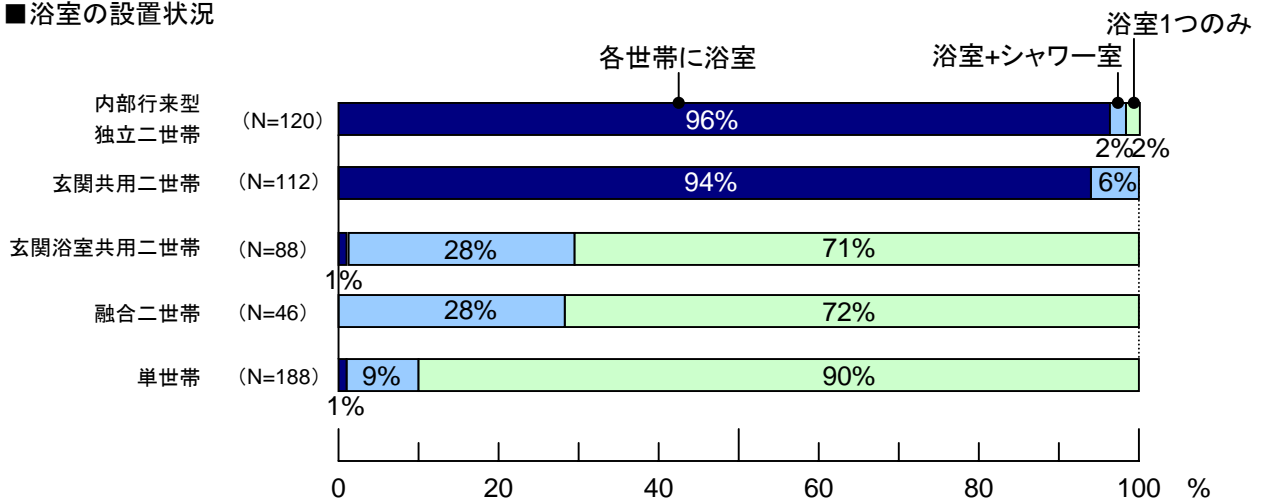
同居スタイルに拠らず浴室2つが満足度高い

●浴室はできれば2つ

浴室の設置状況と満足度の関係を見ると、夕食の独立・融合に関らず浴室2つは「大変満足」が多く満足度が高いことが判ります。

浴室を共用している玄関浴室共用二世帯、融合二世帯では約3割がシャワー室を設置しています。浴室が様々な制約から設置できないときに、シャワー室がよく使われていることがわかります。浴室+シャワー室の群は浴室1つの場合に比べ特段に同居満足度の違いはありませんが、浴室が2つ欲しかった、またはシャワー室が欲しかったという要望はよく見られます。このような要望をかかれた方の家族人数が5~6人と比較的多く、大人数の場合の入浴時間の調整が難しいことをうかがわせます。

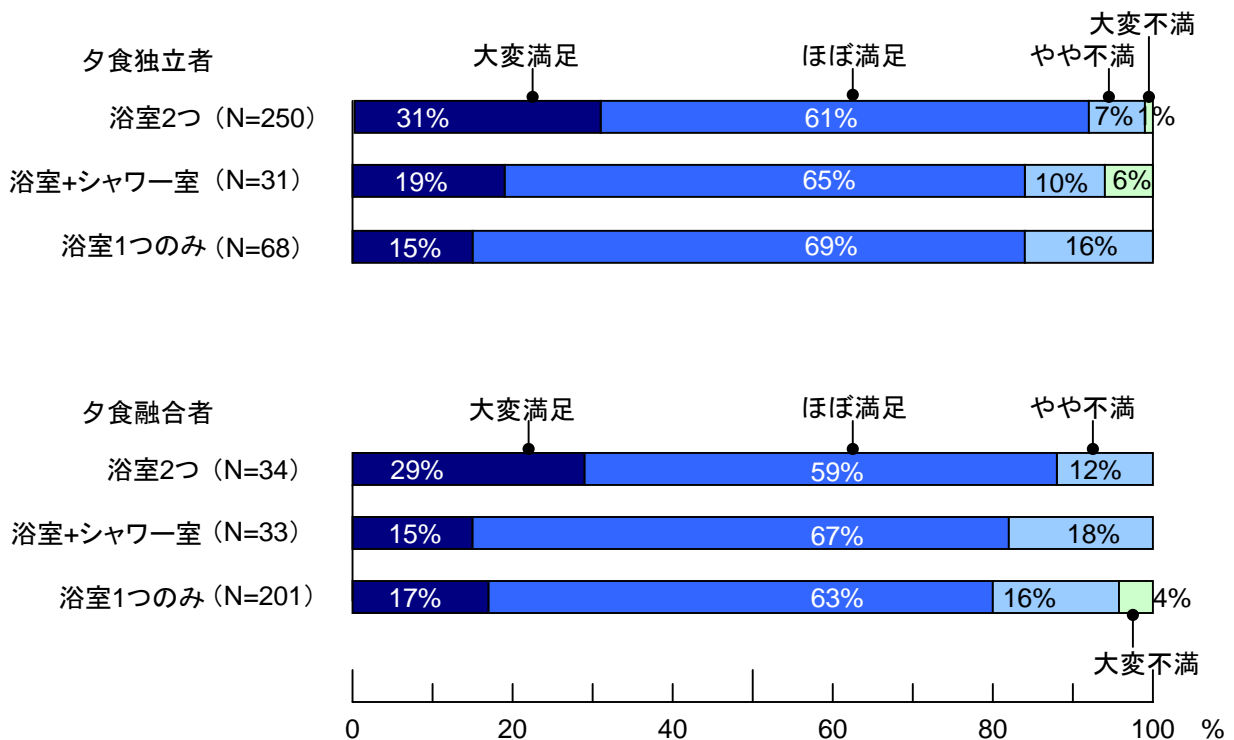
■浴室の設置状況



■ 建物で配慮して良かったこと、配慮すべきだったこと

配慮して良かったこと、配慮すれば良かったこと(浴室・シャワー室関連)	
	浴室を別にしておけばいつでも好きなときにお風呂に入れたと思う。 神経質にならなければよいが、そのときの精神状態で浴槽につかれないときがある。(浴室共用二世帯・5人家族)
	キッチンと食べる場所を別々にしておいて良かった。 できれば浴室も別にしておけば良かったか...。(浴室共用二世帯・6人家族)
	二階にシャワー室を設置しておけば良かった(融合二世帯・5人家族)

■ 同居生活の満足度



世帯間の仕切り

独立二世帯には錠付の建具 共用二世帯なら錠なしの建具

●世帯間の建具、錠の意味は大きい

内部行来型独立二世帯の9割近く、共用二世帯の場合約4割のケースで世帯間の仕切りとなる建具が設置されていました。また、融合二世帯の場合も約3割が建具を設置しており、世帯間の仕切りという意識は夕食融合の場合でも存在しています。

この仕切となる建具の錠について、現状と希望を尋ねたところ、内部行来型独立二世帯の場合は現状錠の設置が7割弱に達し、約3割は両面から鍵のかけられる両面錠となっていました。また、現状と比較し、希望では両面錠が4割と増える傾向が見られました。

共用二世帯、融合二世帯と分離度が下がるほど錠設置の比率が減っていく傾向があります。

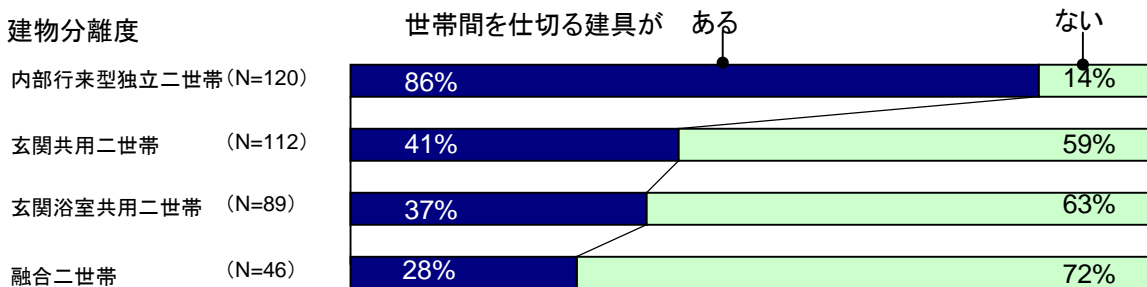
自由回答を見てみると、プライバシーの確保と交流のバランスをとるために建具や錠の仕様を使い分けていることが読取れます。総じて言えば、独立二世帯の場合は両面錠が、共用二世帯の場合は錠なしの世帯間建具がベースになると考えられます。

■建物で配慮して良かったこと、配慮すべきだったこと

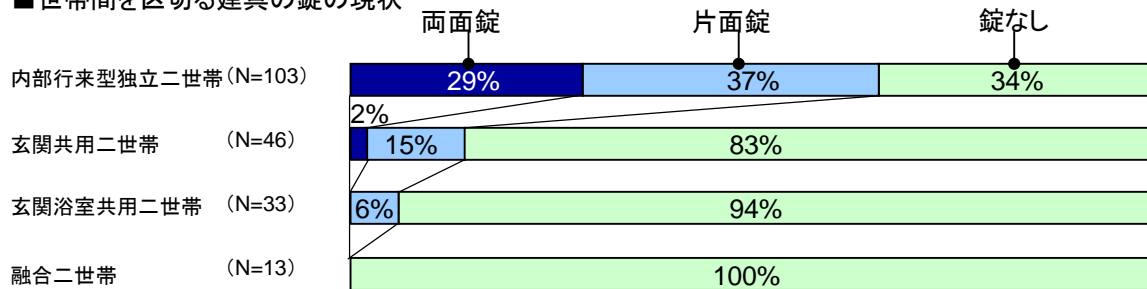
錠の設置	
○	内階段を設け境界に双方から施錠することにより各世帯のプライバシーと交流が安心してできたこと。(内部行来型独立二世帯)
○	来客時など、特別な場合のみ、扉を施錠できることで、子供対策になっていること。(内部行来型独立二世帯)
○	浴室、トイレ、キッチンを別々に良かった。
×	世帯間を区切る鍵のかかるドアを付ければよかった。(玄関共用二世帯)
錠なし建具の設置	
×	階段とリビングの間にドアを設置したら良かったかも。。(玄関共用二世帯)
○	基本的に生活サイクル・リズムが異なるため、セパレートは必須だと思っていたことは、結果的に正解だった。また、親世帯は特に世間体を意識するため、玄関は共用が望ましく、実際そうしたことも正解だったと思われる。
×	ただし、世帯間を建物内部で区切る建具は必要(鍵は不要)であった。(玄関共用二世帯)
○	玄関は共有だが他(キッチン、浴室、トイレ)を別々にした。また世帯間に鍵の無いドアを設置したこと。鍵があると入りにくいし、まったくドアがないと互いの世帯が気をつかってしまうので、錠なしドアは良かったと思う。(玄関共用二世帯)

■ 世帯間の仕切り

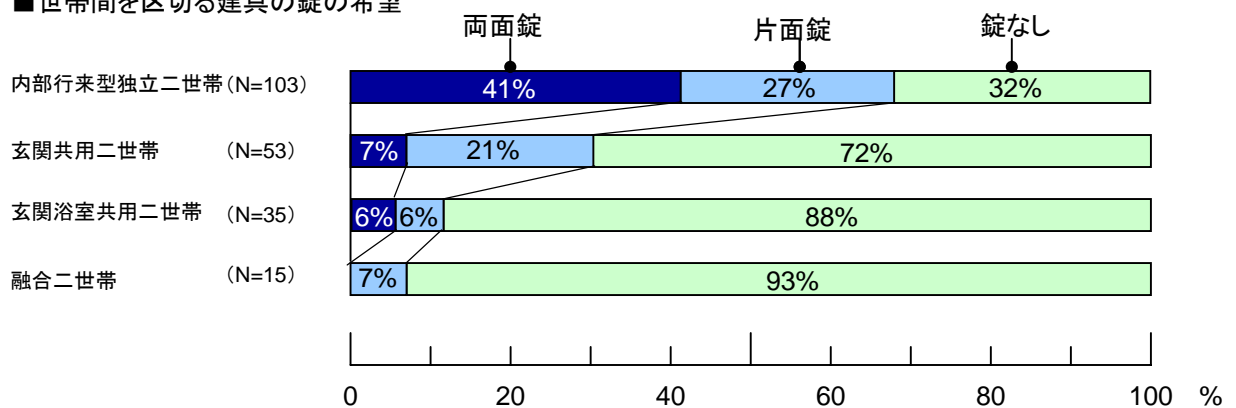
建物分離度



■ 世帯間を区切る建具の錠の現状



■ 世帯間を区切る建具の錠の希望



独立二世帯は賃貸可能に 共用二世帯・融合二世帯は一体利用を考慮

● 次の世代と二世帯同居しない場合のことも考える

二世帯住宅は親世帯の高齢化によりいずれ空き世帯となることが必然であり、将来の活用を視野に入れておくことが必要になります。

将来の賃貸活用は玄関が2つあるか、つまり独立二世帯であるかどうか大きく左右されます。独立二世帯に限れば、賃貸化の希望は3割弱あり、外部行来型独立二世帯の場合は最も多く選ばれた回答になっています。共用二世帯、融合二世帯と分離度が下がるにつれ減るのは玄関をはじめ、水回りを増設する費用に対し、賃貸化の経済的メリットが少ないことを示すものと言えるでしょう。

一方、内部行来型独立二世帯や、共用二世帯では、二世帯住宅として次の世代の息子、娘夫婦を住ませたいとの希望も強くなっています。

残りの世帯が一体で利用することについては分離度が下がるほど意識が強い傾向があり、共用二世帯、融合二世帯では5割は一体利用を考えています。分離度が低いものは面積が狭いことが多く一体利用しても持て余す感覚がないものが多いためと思われます。

■ 資産活用の配慮について(自由回答例)

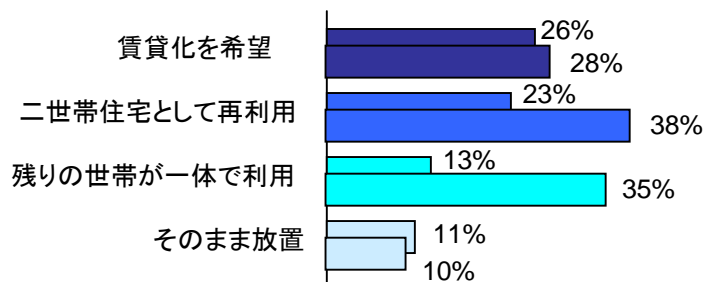
賃貸化準備	資産活用は考えてなかった。父が亡くなった後、あいた世帯に子供が同居できなくなった場合のことも考えておくべきだった。(外部行来型独立二世帯)
	やはり賃貸計画等があるのであれば、絶対水周り(風呂、洗面所、台所等)はすべて別にしておく必要がある。(玄関浴室共用二世帯)
	一部を賃貸できるように、キッチン・トイレ・浴室を増設できる間取りにしておけばよかったと思います。(単世帯)
	片方の世帯を賃貸できるように玄関等も分離しておくべきだった(玄関共用二世帯)
	十分なスペースで快適に暮らせることを考えたので、小家族化したときには非常に贅沢な使い方になってしまう。防犯、防火を考えた一部賃貸化しても問題ない設計は考えても良かったかも知れない。但し、当初建築費がアップしたから、実行に移せたかどうか疑問ではある。(単世帯)
二世帯再利用	建築当初は、自分の親との同居生活であったが、親がなくなり1世帯分あいてしまったところ、娘の家庭に子どもが生まれ、当時居住していた家が手狭になってしまったので、今度は娘夫婦と子どもが同居するようになった。(玄関浴室共用二世帯、1997年築)
一体利用重視	すべてを別設計にすることで賃貸にできることも考えていたが、実際には開いて世帯のスペースも荷物を置いたりして使ってしまったので、賃貸する可能性はなくなったと思う。そう考えると、共用できる部分は共用したり、あるいは、将来賃貸ではなく一体で使う可能を考えて設計すればよかったかも。(内部行来型独立二世帯)

■将来親世帯スペースが空いた場合の活用

●独立二世帯

上段:外部行来型独立二世帯 (N=62)

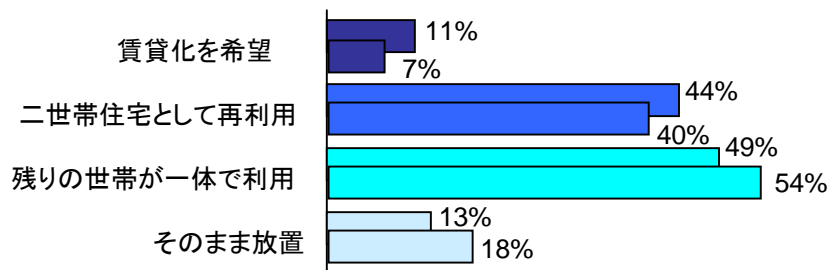
下段:内部行来型独立二世帯 (N=120)



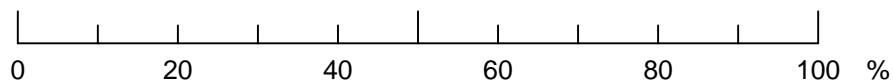
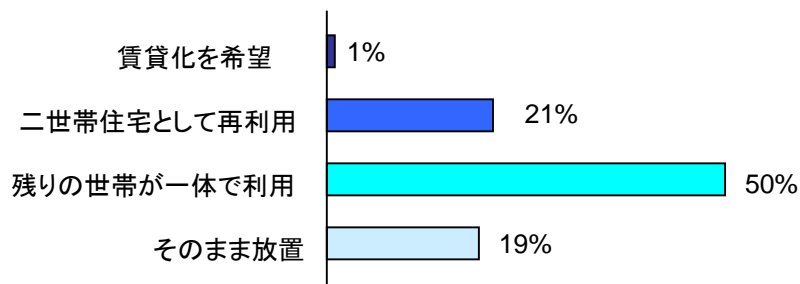
●共用二世帯

上段:玄関共用二世帯 (N=112)

下段:玄関浴室共用二世帯 (N=89)



●融合二世帯 (N=234)



同居時にどうするかは考えておく必要がある

● 同居スタイルは夕食独立に対応するか、夕食融合に限定するか

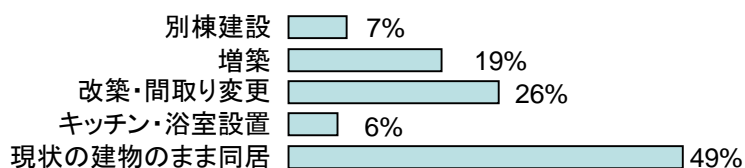
親同居想定者の住宅は、同居を想定せずに建てられたものが約半分あり、7割が単世帯住宅となっています。このような住宅で同居することになった場合、そのまま同居に移行できるのでしょうか。

将来同居時に増改築を想定しているものは約5割あり、別棟、増築といった自由度の高い方法を想定しているものが計26%を占めています。

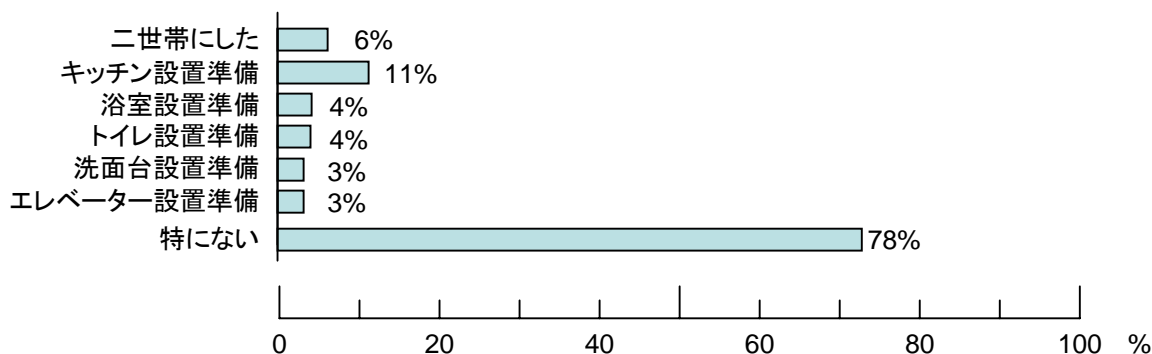
将来同居のために新築時に配慮したことでは、約2割が何らかの配慮をしています。その多くは軽微な改築で水回りを設置するための配管準備であり、特にキッチンが最も多くなっています。

このように、同居に対応するためには様々な方法がありますが、快適に同居するためには同居スタイルに合わせた改造が必要であり、あらかじめ夕食独立にも対応できるようにするか、夕食融合に限定するかを考えておく必要があると言えます。

■ 将来同居時に想定している増改築 (N=176)



■ 将来同居のために新築時に配慮したこと (N=176)



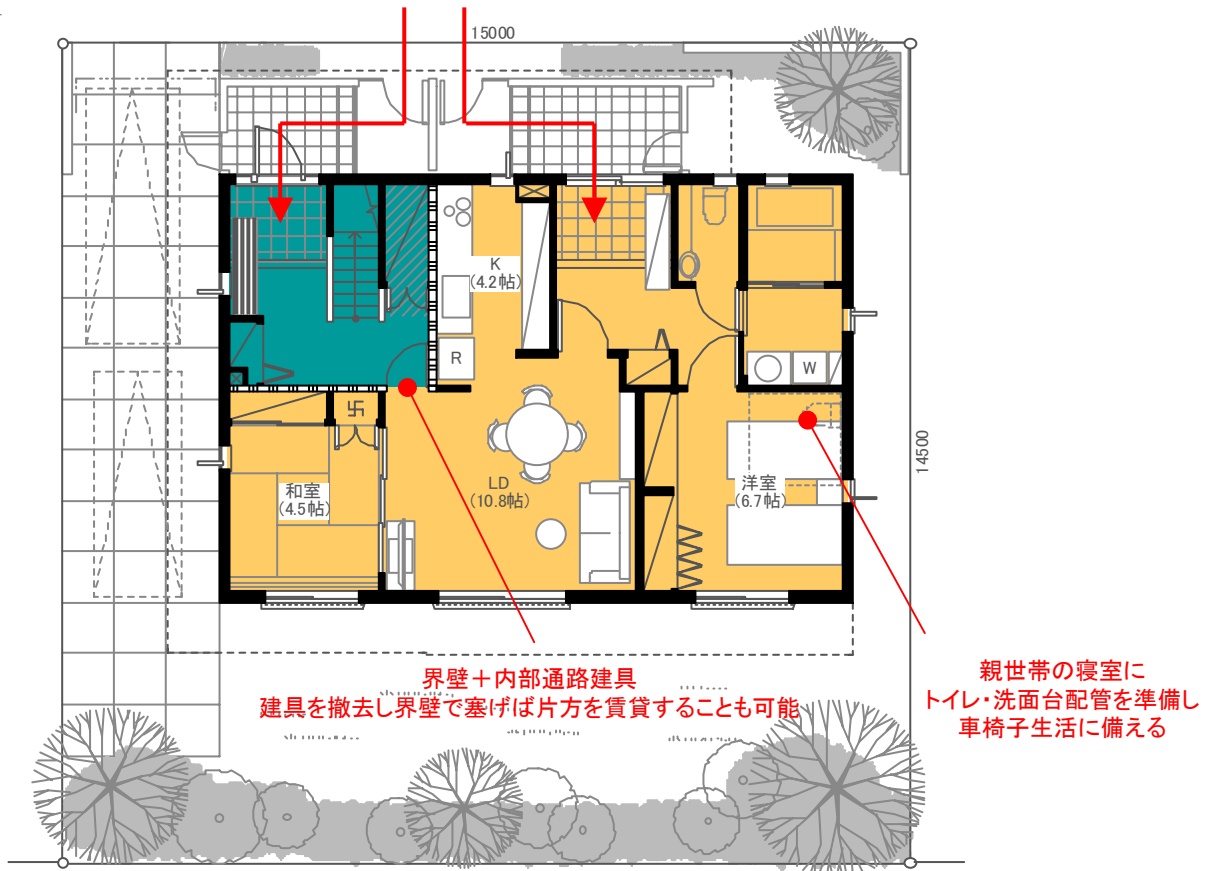
設計提案例1:「夕食独立」同居のための独立二世帯

● 独立二世帯(内部行来型)

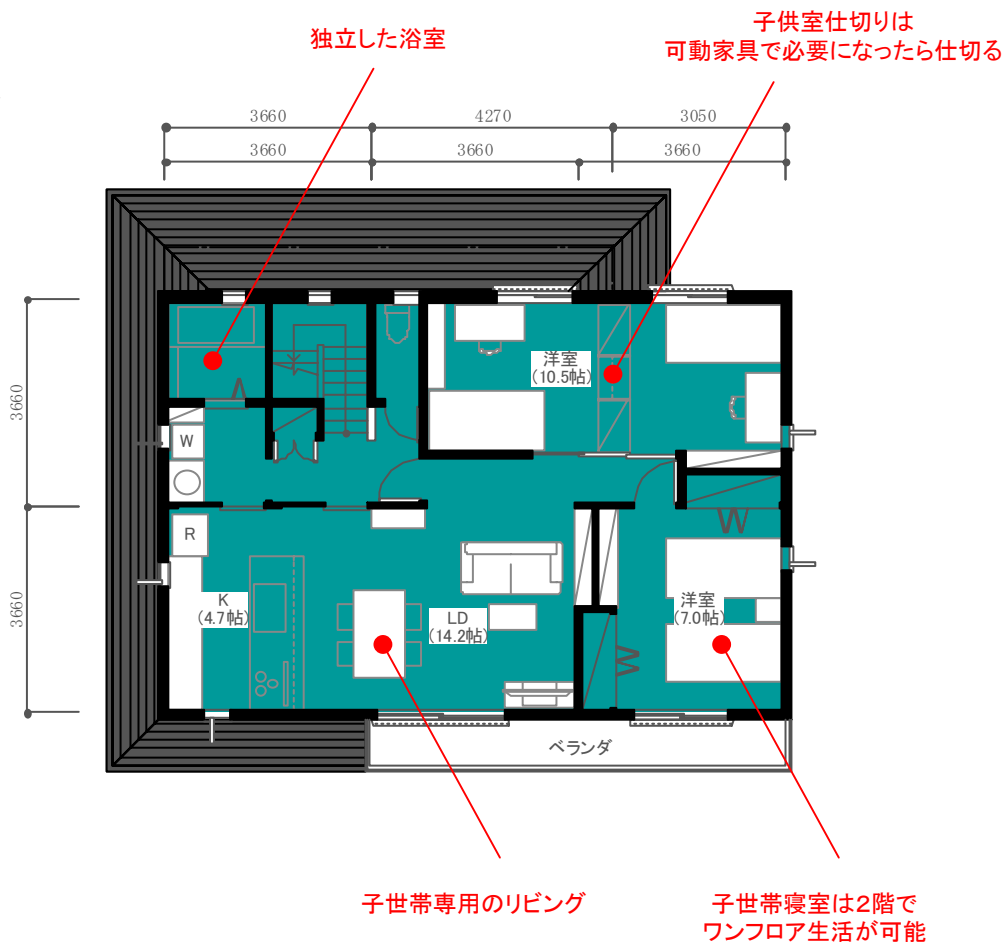
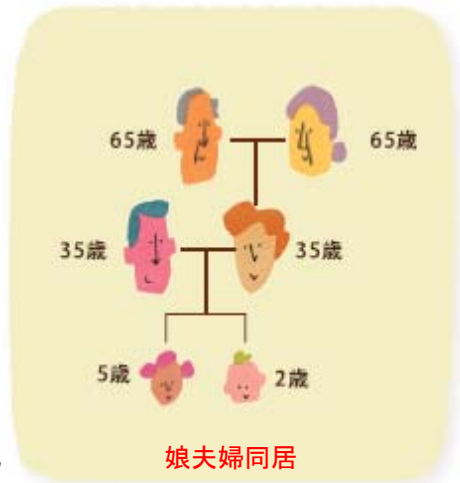
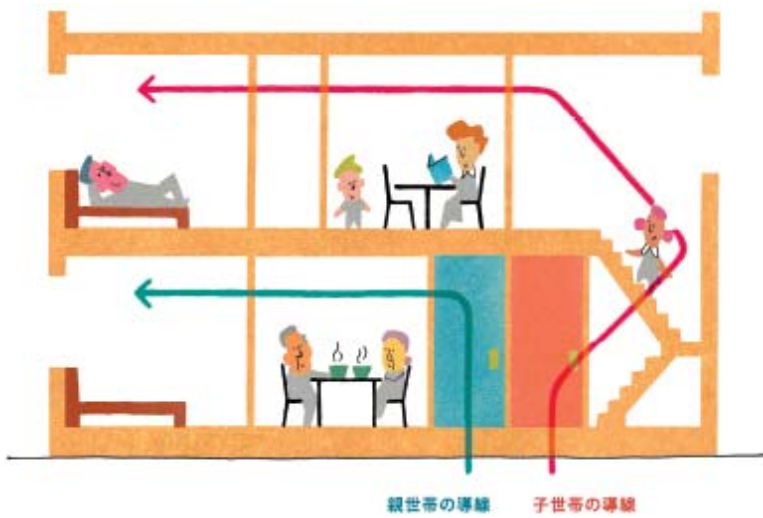
育児期×娘夫婦同居×夕食独立

夕食を別々にする同居スタイルに合わせて、世帯別に玄関・浴室・キッチンを入れて生活を分離しながら、内部通路で気軽に行き来できるようにしたプラン。内部通路となっている建具を塞ぎ、賃貸できるように世帯間はあらかじめ建築基準法上の界壁で設計されています。

対外的に独立性をアピールする両世帯対等のアプローチ。
独立した玄関で深夜の帰宅や休日の来客にも気兼ねが不要。



1階



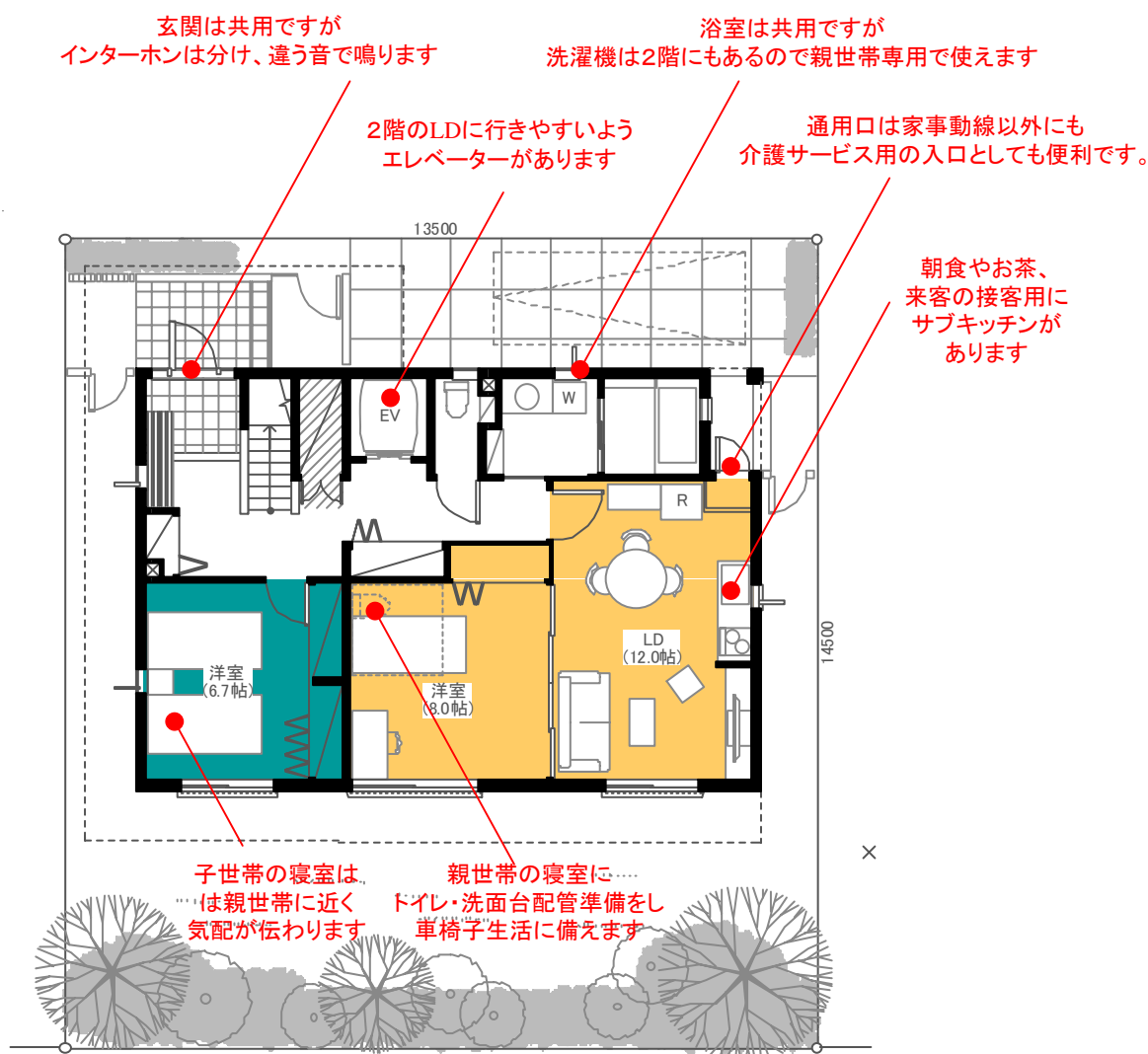
2階

設計提案例2:「夕食融合」同居のための融合二世帯

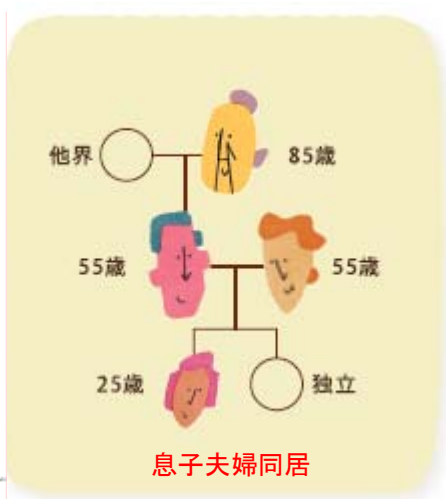
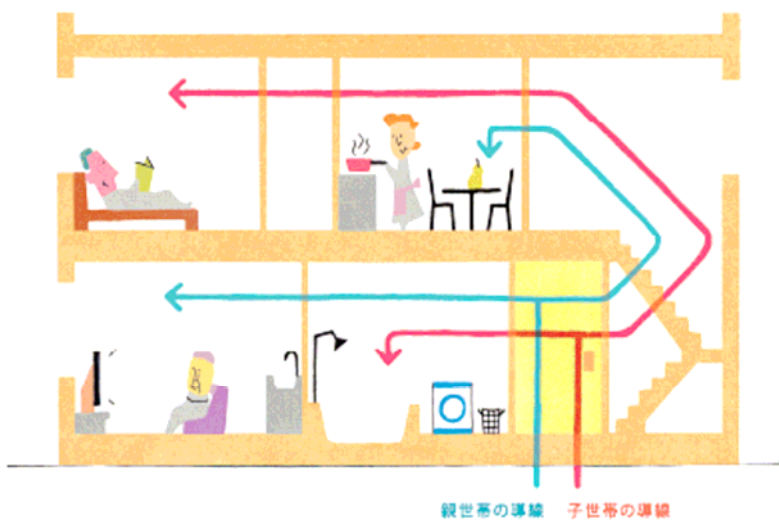
● 融合二世帯

加齢期×息子夫婦同居×夕食融合

夕食を一緒にする同居スタイルに合わせて、玄関・浴室・2階キッチンを共用。親世帯の利便性を考え、夕食の場である2階へ通じるエレベーターがあり、親世帯にはサブキッチンや勝手口を設けたプラン。親世帯専用のゾーンが明確で、夕食時以外は自立した生活が営めます。子世帯の寝室を1階にとることで、親世帯の気配がわかると共に、2階のリビングや個室の広さ、収納の量を確保しています。

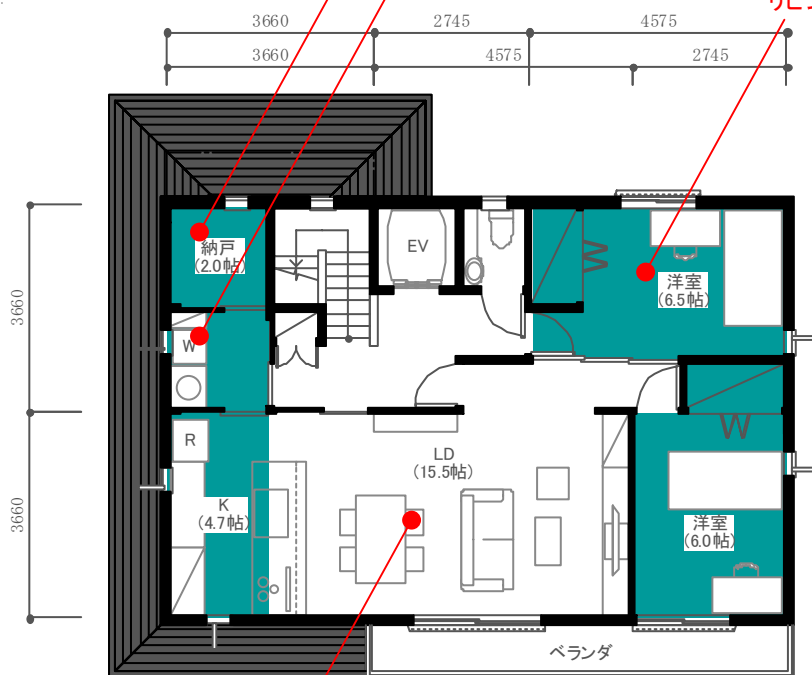


1階



浴室を共用にしたので
収納が充実しました 子世帯用の
洗濯機です

独立した孫の部屋は
リビングの延長の居場所になります



母の夕食はここで一緒に食べます

2階

本調査の意義

文化女子大学 造形学部 住環境学科
教授 長山 洋子

本調査の意義

本調査は、旭化成ホームズ(株)の二世帯住宅研究所が居住者に対するアンケートから、生活行為を洗い出し、家族構成、ライフステージや同居スタイル別に住宅の計画との関係を比較・分析したもので、このように二世帯住宅居住者の生の声を収集した調査の意義は深い。二世帯同居のスタイルが多様化していること、同居理由を居住者の生の声から拾い出していること、そして、夕食を「世代ごとに独立してとるか」「一緒にとるか」という行為が同居スタイルと密接に関わっていることなどに着目した上で、10年後、20年後の暮らしを予測しながら、生活行為からプランニングを行なうことが望ましいとしている。

本調査の意義として次の4点が挙げられる。

1) 家族構成やライフステージと二世帯同居のスタイルの傾向を見出したこと

二世帯同居の家族数が4人以下の小規模家族や親世帯が片親の同居の割合が大きいこと、この割合は年齢が高くなるほど大きくなっていること、年代が若いほど娘夫婦との同居が増える傾向にあることなど、二世帯同居スタイルが多様化していることを見出した。これは二世帯同居にも、少子高齢化、晩婚・非婚化、女性の労働力率の上昇など現代ライフスタイルの影響が現れたものとなっていることが分かり、今後の二世帯同居を考える上で重要な知見となる。

2) 同居に至る理由を居住者の生の声から拾い出していること

20代から80歳代までの現在親子同居者、経験者、親子同居想定者など幅広く分布したアンケート回答者から、生の声を拾い出していること。特に、同居想定者は、親世帯が片親になった時や要介護になった時に同居を考えようとする傾向があることや、育児協力のイメージや経済面のサポートなどより具体的な同居理由を把握している。同居の具体的な理由が明らかになることで、親世帯が老後をどのように暮らすか、子世帯の暮らしに親世帯がどのように家事・育児協力できるかなど、現実的なイメージを見出せる。生の声を拾い出すことの意義は大きい。

3) 夕食の独立・融合と同居スタイルの関係を見出したこと

食育が話題になり食の安全性が問題になっている今日、食事は家族生活の要として重要であるが、本調査では夕食をどのように摂るかが、同居スタイルを決定付けることを見出した。夕食独立では生活全般が別という感覚を持ち、夕食融合では生活が一緒という感覚を持つこと、夕食融合は父親単身や4人以下の小人数二世帯、娘夫婦同居の場合に多くなること、夕食の独立・融合と建物分離度との関係などを明らかにしたことが意義深い。二世帯居住では、夕食の摂り方が住居計画の全般に関わってくることが明らかになった。

4) 夕食が一緒であっても洗濯等プライバシー意識の高い行為は別々に行なわれる場合がある ことを見出したこと

「洗濯・物干し、取り込み」が夕食の独立・融合とかがわっていることを見出した。夕食独立の場合、洗濯はほぼ別々で行い、夕食融合の場合でも洗濯は別々という同居スタイルが存在することを明らかにした上で、プライバシー意識の高い行為は別々に行われる場合があるとしている。「洗濯」という行為にプライバシー意識が反映されること、夕食融合でも洗濯は別であるというプライバシー感覚を発見したことは興味深い。このプライバシー意識は、住宅プランニングにおいて重要な意味を持つことになるだろう。

● 洗濯に見る同居のプライバシー

これからの二世帯住宅居住予備軍である女子大学生(一部未婚の卒業生)とその親に対して、将来二世帯住宅に住む事になったと想定して、プライバシーについてどのような意識を持つか、キッチン、洗濯機、浴室の共用の有無と、洗濯(下着)について簡単なアンケートを行なった事例を紹介する。

女子大学生約50名に将来結婚したら「親と暮らしたいか」と聞いたところ、約6割が「プライバシーが心配なので一緒に住みたくない」と回答した。「暮らしたい」「暮らしても良い」と回答した約4割のうち、多くは自分の親と住む事を希望し、親が自分の子供の子育てに協力してくれることを望んでいた。

プライバシーを必要とする度合いを測る尺度として「誰の下着を洗濯できるか」「誰に自分の下着を洗濯してもらってもよいか」を聞いた。夫の父母の下着の洗濯に違和感がない約6割の子は、浴室の共用にも寛大であり、逆に親に自分の下着を洗ってもらうことにもお互い様と言う意識がある。同様に息子の嫁の下着の洗濯に違和感を持たない約7割の親も洗濯機や浴室の共用には寛大であるが、息子の嫁の下着を洗うことに違和感を持つ残り3割の母親は、共用にも反対であることが多かった。しかし実の母娘の場合は、9割以上がお互いの下着を洗うことに違和感を示さなかった。

● 二世帯同居におけるプライバシーの重要性

上の事例は娘夫婦同居志向の増加や家事育児協力の頻繁さ、浴室や洗濯機の独立・共用を左右する要素の一例を示すものと思われる。このようにプライバシー意識の持ち方は、独立・共用といったプランニングとそこに同居したときの満足度を大きく左右しているであろう。これからの二世帯住宅では、生活行為とプライバシー意識の持ち方からのプランニングが求められていくと考えられる。今後も本調査のように居住者のプライバシー意識を探り、住まい造りに活かしていくことを期待したい。

調査報告書執筆者:

旭化成ホームズ株式会社 二世帯住宅研究所
所長 熊野 勲

旭化成ホームズ株式会社 二世帯住宅研究所
主席研究員 松本 吉彦

旭化成ホームズ株式会社 二世帯住宅研究所
主幹研究員 黒木 美博

本調査の意義 執筆者:

文化女子大学 造形学部 住環境学科
教授 長山 洋子

親子同居スタイル・多様化の実態

二世帯住宅における独立と融合

調査報告書

発行 2007年7月31日
発行所 旭化成ホームズ株式会社
二世帯住宅研究所

〒160-8345 東京都新宿区西新宿 1-2-4-1
エステック情報ビル
電話03-3344-7045

